毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治三十年六月廿五日發兌

第百四號

三華散人 紀成虎一著

將軍之半面

議論文章家としてのモルトケ伯

普佛媾和談判の
寫眞版密謁入り
定價廿五錢郵稅四錢

將軍之半面とは何ぞや。

將軍とは世界を通じて將軍てふ二ヶ文字を特有すべき者を云ふ本書は獨逸再造の元勳たる即ち**モルトケ將軍**を指す。

半面とは將軍の武赫々たるは日星と並懸る故に本書は却て**其一生**の**眞境涯、眞意致**たる**議論文章詩歌筆札**乃至**隱**れたる**性情言行**を**說**く。

將軍の筆は早く獨逸文學社會に於て「寧ろ文」と云へる一大敬歎を起せる者譯者更に其十年逸蛇の墨を磨し之を用ゆるや自在にして圓轉之を遣るや沈麗にして峭健なるものを以て我睡死せる文學界に向て優に一大醒覺者たらむとす讀者請ふ試に一誦せよ。

發行所 東京々橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 吉崎圓吉　編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十年六月廿五日發行
家庭雜誌第百四號

目録



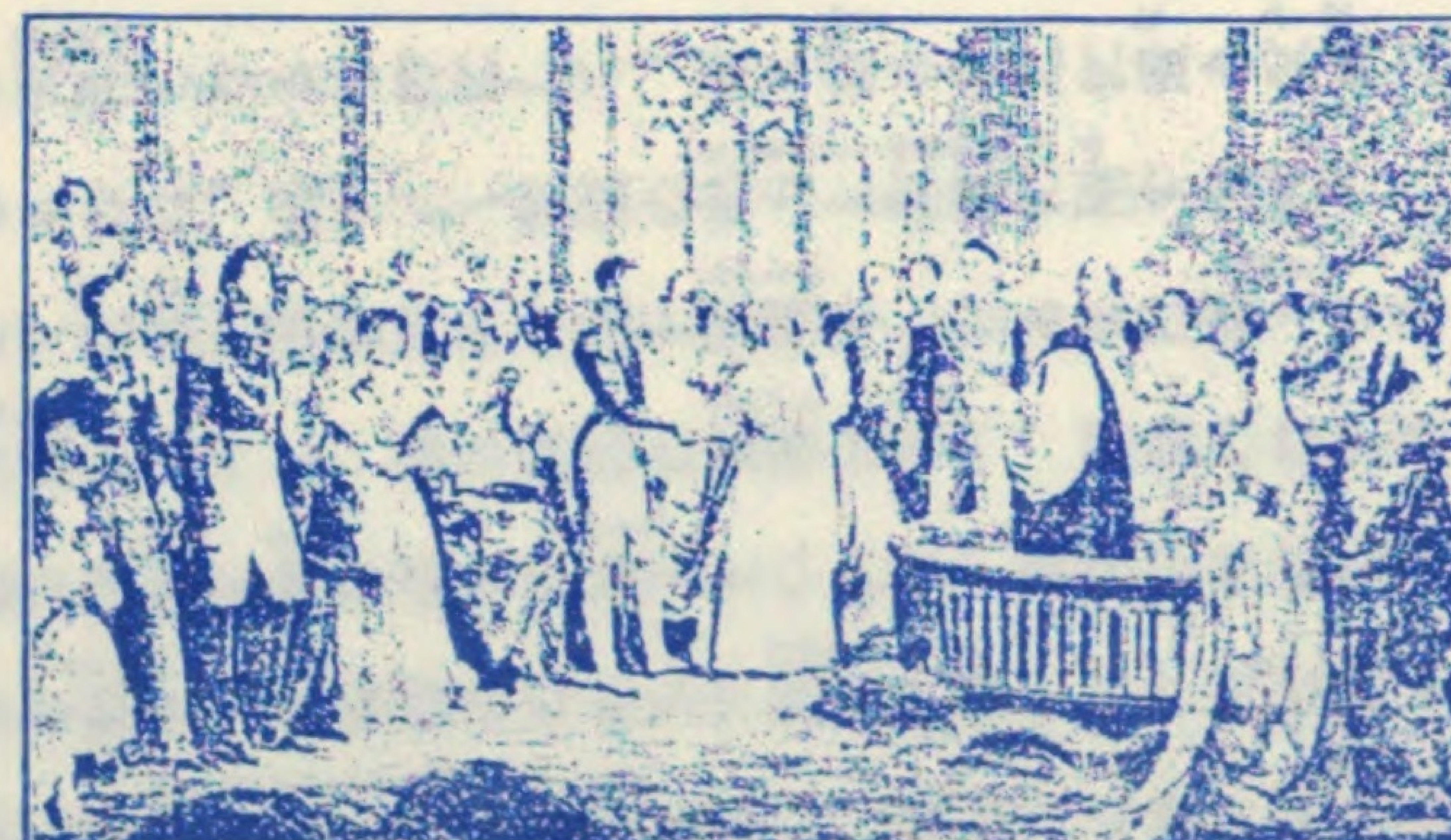
英女皇六歳



同最近肖像



同廿一歳



英女皇結婚式 (1840)



英女皇戴冠式 (1837)

小川一真製

家庭雜誌第百四號
（明治三十年六月二十五日發兌）

社説

事務的才能の修養

文明の世の中はすべて事務的なり、文明の世に處するは規律と實行とを要す。

時計の重寶がらるゝは其の規律正しければなり、汽車の重寶がらるゝは其の規律正しければなり、銃砲の重寶がらるゝは其の規律正しければなり、其他西洋器械の世に重寶がらるゝは其の規律正しければなり、人も物質と同じく文明社會の組織中にあれば、一個の機械とならざるべからず、少くとも機械的となりて規律正しく世に處せざるべからず、機械的となり規律正しからんには事務的才能を修養すべし。

これからの世界には男女に限らず、事務的才能を修養すること處世の第一義にして、之を修養し置く時は、何事に當りても決して當惑をすることなく、文明の事業を實行するに毫も支障を生する事なかるべし、事務的才能とは、日々の勤務にして、日々爲すべき事は倦まず怠らず一生を終るまで規律正しく實行するの義にして、換言せば規律によれる勤勉なり。

事務的才能を養成するには學校の敎育よりも、幼稚の時より兒童に其習慣をつけしむべし、習慣は眞に第二の天性となるものにして、最も重きを之に置き父母たるものは、必ず〱習慣の勢力を忽諸に附す勿れ。

さて兒童に事務的の才能を修養せしむるには種々なる方便あるべし、毎日何時に食事を與へ、朝起の後には必らず顏を洗ひ必らず楊子をつかひ、食後には必らず口を嗽き、就寢時には必らず寢衣に着かへ、或は日々必らず讀書算術等の復習を爲し、或は日々必らす家庭

の一部を掃除する事等日々必らず規則的の實行を爲さしむるは漸次に事務といふ好習慣、好才能を附與する自然的敎訓の方法と知るべし。

或家庭敎育熱心の細君、四歲になれる女兒をして、近來流行する、一枚々々剝ぎ去る柱暦を剝ぎ去らしめ、以て事務的才能の習慣を附せんと試みたるに、三五日の程は、女兒は其日々の事務をば忘却し怠慢となりしも倘嚴重に日々其事を命令せしかば、日を經るに從ひ自づから進んで之を勤め、爾來一日として遺忘せし事なかりしといふ、以て習慣の勢力を知るべし。



下根愚鈍のものと雖も幼時より事務の習慣を養成する時は大人となりて勤勉以て生涯の經營を爲すもの多し通常の人に此才能を附與すること決して難事とせず、父兄たるものは、宜しく玆に意を留めて、兒童をして成人の後、天晴文明世界の役に立つやう事務的才能を修養する義務を有する也。

史談

英女皇ヴヰクトリヤ

本月二十日は、英國女皇ヴヰクトリヤ陛下が、千八百三十七年、十八歲の處女にて、大英國の寶位に登ぼり給ひしより、丁度六十年目に相當するにより、英國にては、本月二十二日を以て、金剛石祝典と稱し、盛大なる祝賀の式を擧行する筈にて、此日には英國四億の臣民が、地球の東より西より南より北より、異口同音に讚美の聲を揚ぐるは固より、五大陸に跨れる其總べての屬國、殖民地、保護國より、其國王大守各入朝し

て、慶賀の意を致すは固より、歐米諸國の帝王大統領等も亦其式に列し、東洋に於ても、支那は既に特派大使張蔭桓を遣はし、暹羅は國王自から英國に向つて出發し、畏くも我天皇陛下には威仁親王殿下を御名代と



ロンドン、バッキンハム宮

して先月上旬英國へ遣はせられたる次第なれば當日祝賀式の尊嚴、光榮の如何に盛大なるかは誠に想像するに餘あるの事なりとす、而して斯の如き盛大なる祝典を擧行せんとするに到りしは宮廷より豫じめ其内意を傳へて之れを促がしたるものにはあらで女皇に於ては寧ろ之れを否まれしと噂する程なりしも、全地球に蔓延せる英國臣民が忠愛の至情は之れを等閑に附する能はず、其熱心は自から溢れて玆に到りたるものにして、蓋し女皇の高德が深く人心を感化するものありしに由るなり、抑も女皇陛下の如く在位六十年の長きに及べるは、歐洲の歴史に於て未だ曾て見ざる所にして、殊に英國は其治下に在りて國運非常に進步して至美絶高の時代を現はし政治は立憲の妙を極め、貿易は世界の中心をなし、版圖の廣き、民衆の多き、將た又た、富度の至大なる兵力の至强なる、皆全世界に冠絶するに到り、其他學術技藝、産業、軍事に於ても亦た空前の全盛を來たせりされば英國民が此盛大なる賀式を擧げて、女皇の德を頌せんと欲するも無理ならぬ事ぞかし。

陛下の家系

陛下はアレキサンドリナ、ヴヰクトリヤと申し奉り、ブルンスウヰックの家系に屬し給ひ、先帝ウヰリアム四世の御弟、ケント公爵の獨子にましまし、千八百十九年五月二十四日ケンシントンの宮殿に於て、初めて此世の光を見給へり、御父ケント公爵はヂョーヂ三世

の四子に當たらせ賜ひ、世に『榮えの宮』と稱されて、名望自から高く、先帝ウヰリアム四世に皇子おはさざりければ、後々には九五の位に即き給ふ御身なりしが陛下誕生の後、未だ一歳ならずして、薨去あらせられしかば、陛下は其後、專ら御母ルイザ、ヴヰトリア内親王の御手によりて人となり給ひぬ、陛下は生れて一ヶ月にしてケンシントンの宮殿に於てキャンターベリー大僧正より基督敎の洗禮を受け賜ひ、露國亞歷山皇帝敎父となり、ウッテンブルグ皇太后敎母にならせて、命名式を擧げ給へり、陛下は皇位に即かせ給ふ數ヶ月前迄は大抵ケンシントンの宮殿に在り、いと質素なる生活を爲し給ひ幼時は母宮より親しく讀書習字など習はせられ稍長じて僧正博士など召されて、學習を怠り給はず、隨分賢明にて學問思想速かに發達し、最も音樂、詩學を好み數學科學に達し、佛、獨の國語に通じ又た羅甸語希臘語をも解し給へり、陛下は少時身躰最も壯健にして容貌殊に美はしく、頰豐にして眼涼しく、資性又た敏慧にして頓才あり、時に滑稽を弄し、侍嬪をして覺えず失笑せしめ給ふともありしと云ふ、母宮は特に基督敎に御熱信にて、陛下が六歳にならせ給ひてよりは、日々の課程として



ロンドン附近ウインドソル宮城

聖書を讀ましめ給ひ、陛下も亦御信仰怠り給はざりしと云ふ、斯くて陛下十二歳とならせ給ひし夏、伯父ヂョーヂ四世崩御あらせられ、御弟ウヰリアム四世位に即かせられしが陛下十八歳とならせ給ひし時、重病に罹からせ給ひしも、世嗣おはさゞりければ、國法に依り、陛下を召して、東宮に立てさせ給ひ、幾程もなく、あへなくならせ給ひしかば、陛下は玆に至尊の寶位を踐ませ給ふとなりぬ、時維れ千八百三十七

年六月二十日、森の若葉の茂げり合ひて、山時鳥も初音を漏らす頃なりき、

處女としての女皇

女皇陛下は十九歳の妙齢にて、ケツシントンの宮殿を辭して、ウヰンゾルの王城に入り給ひぬ、陛下は未婚の處女を以て、慈愛海よりも深き母宮の膝下を離れ、廟堂の高きに座して、一國の安危を擔ひ、萬機の政を親裁せざるを得ざるの身となり給ひぬ、陛下や天性仁慈、正直、にして純潔にましませり、人或ひは陛下の女性柔軟の資を以て、如何に宰臣に處し給ひしかを知らんと欲するなるべし、されど陛下は寛容なれども決して柔軟ならず、意志堅確にして思慮明白なる所、多くチユードル家的遺風を存し、其意見を吐露するに勇に、毫も臆する態なし、陛下にして十六世紀時代に仕せ給はゞ、必ずエリザベス女王たり給ひしならん、然ども陛下は十九世紀に王となり給ふが故、多く其鋒鋩を現し給はざるなり、陛下の始めて帝位に即かせらるゝや、メルボルン卿は其首相として、日夜小女皇に咫尺し、其教師となり、朋友となり、補佐となり、陛下も亦た娘として彼れを敬し、弟子として彼れに從がひ給へり、されども陛下は情に泥づみ給ふとなく、メルボルン卿の當時陛下に向かひ或事柄に就き便宜に之れを處せんとを奏請するや、陛下は嚴然として、「卿よ、予は正邪を判別するの道を教へられたり、便宜てふ如き曖昧なる文字は之れを聞き又た之れを知るを好まず」と答へ給ひけるとぞ、されども陛下は又た情誼を重んじ給ふと厚く千八百三十九年五月、メルボルン卿の故ありて辭職を請ふや、陛下は殊の外力を落し、泫然として涙を垂れ、肯て之れを許し給はず、殊に鄙野粗暴なるピール氏が其後を襲はんとするを聞き、益々卿の留任を迫り給ひしも、其決心動かざるを見て、遂ひに當時七十の老翁なるウエリントン公を召し、萬事を打明け後事

を托し給ひしに、公は陛下の公明なるに感服したれども、公も亦た磊落に自己の老耄して用に堪えざるを陳謝し、明かにロバート、ピール氏を信任し給はんことを奏しければ、陛下は乃ちピール氏を召し、直ちにメル



ウワイト島チプホルン離宮

ボルンの辭職を悲むと、及び國會は決して解散すべからざるとを告げ給ひぬ、ピール氏は少しく驚きたれど、何氣なく宮嬪の更迭を奏請せしに陛下は直ちに斷然之を拒絶し給へり、此に於てピール氏退きメルボルン卿復職するに到りたりと云ふ、されども陛下は其好み給はぬ臣下をも決して疎略にし給はず、グレヴ井ル氏は當時の模様を語たり陛下はピール氏を好み給はねども、好く彼れを遇し、彼をして全く滿足せしめ給ひきと曰へり、陛下

此時年僅かに十九、而かも其嚴明なる、概ね斯の如きものありしなり、處女としての陛下は深くメルボルン老卿の薫陶を受け給へり、卿は陛下の性質を語りて曰はく「陛下には何事をも打明けて、自身直接に申上ぐるを好しとす、何事にても御裁可を請はんとならば、其理由を明白に説明するを要す、陛下は物の根本の理を知るを喜び、且つ之れを簡單に明白に說くを好み給へり」と

妻としての女皇

陛下は千八百四十年二月十日、御齡二十一にして、獨逸サキセ、コーブルグ、ゴータのアルバート親王と結婚し給へり、而して三男四女を擧げ給へり、第一子はヴ井クトリヤ内親王と申し、獨逸今上の父帝に嫁し千八百八十八年寡婦とならせらる、第二子はアルバート、エドワードと申し、又たの名をウエールス親王と稱し、皇太子の位に備はり給ふ、第三子はアルフレッド親王

又たはエヂンボロー公と申し露國皇女を娶り給へり、第四子はヘレナ内親王と申し、第五子はルイズ内親王と申し、第六子はアーサー親王又はコンノート公とも申し第七子はビーフリス内親王と申す、陛下は處女としては嚴明に國事を見給ひしが、人の妻となりては、順貞にして能く夫に從ひ給ひ、又た慈愛深くして兒女の養育家庭の調和に忙はしくなり給へり、陛下が哺育の責に當り給ふ時、夫なるアルバート親王は實際皇帝の事を見、陛下が女皇として立ち給ふ時も唯親王の反響となり給ふに過ぎざりき、されば此時代を以て陛下が處女の時代若しくは寡婦の時代に比するに其事蹟著しき相違あり、斯くて、陛下は妻としての生涯を送り給ふと二十一年、千八百六十一年十二月十四日、ゆくりなく御夫アルバルト親王と長き別れを爲し給ひ、而して御母ケント公爵夫人も亦此歳を以て逝き給ひぬ、陛下此時の御悲しみ申すも畏こき業にこそ、後に宰相となりて英名を轟かせしヂスレーリ氏は親王の死を送りて曰へらく「我等は國王を葬れり、此獨逸御出身の親王は二十一年の間、他の王の及ぶ能はざる明智と活氣とを以て英國を治め給ひき、彼れは實に動きなき女皇の宰相たりしなり」と、之れに由るも親王の如何に英明にして、又た如何に能く陛下を輔け給ひしかを見るべし、陛下は斯くて無限の悲哀に沈み給ひ、宮中の行事にも多くは臨み給はず、巡幸をも全く絶ち深く退隱せさせ給ひしが、國王としての重要なる務めは決して欠かし給はざりしとなん

寡婦としての女皇

陛下の眞の政治は其寡婦時代に始まりしなり、其處女時代に於ては政務に慣れ給はで、一に之れを老相メルボルン卿に委し給ひ、妻としての時代に於ては只管アルバート親王の英明に依賴し給ひしが、寡婦となり給ふに及びては、漸く陛下自身の主義感想を充分に發揮

し、躬親から萬機を所斷し給へり、されども陛下は飽く迄憲法の明文を嚴守し、能く英國政治の發達せる狀態を解し、決して專制の處置なく、深く閣臣を信任し彼等をして自由の手腕を振はしめ、又た各派撰出の首



ハイランドパルモラル離宮

相を平等に優遇し給へり陛下は元深く獨逸に同情を寄せ給ひしが之姻親ある自然の情に基づくのみにはあらずして陛下の能く維廉一世及びビスマークの人物を信じ、獨逸統一將さに成りて其勢ひ四隣を壓するに到らんとするを看破し給ひたるに由れり、而して陛下は深く露國を憎み給ひしが、後ビーコンスフィールド伯がパーマストンの故智に倣ひ、排露政策を行ふや、漸く其偏僻に失するを看破し、グラドストン內閣に慫慂して、稍政策を改めしめ給ひぬ、ベンチエデー事件に就き英露殆んど開戰せんとして、漸く平和に局を結たるは陛下の力與つて多きに居ると云ふ、陛下は又た波蘭事件に於て、能く內閣を警醒し、佛國と結んで露國と開戰せんとするを避けしめたり、此時の首相パーメルストン卿は丁抹の爲めに戰はんと云ひ、佛王ナポレオン三世は波蘭の爲めに戰はんと云ひしも、陛下何れの爲にも戰はざらんとを主張せられたりしが、內閣の多數は首相よりも寧ろ女皇の說に贊成したりとぞ、斯の如く陛下が國家の危機を救ひし事は甚少からざりしなり、然り而して英國が最も盛なる發達をなせしは實に陛下が寡婦としての時代に在りしなり

女皇と英國

英國は古來每に女皇の治下に在て、盛なる發達をなせり、西班牙のアルマダ艦隊を擊破して海上の主權を立て、文運無比の發達をなせしはエリサベス女王の治下

なり、憲法を確立して英國の自由を建てしはメーリー女王の治下なり、佛國の勢力を挫きて、英國の覇權を立てしはアン女王の治下なり、而してヴヰクトリヤ陛下の治下に於ては富强世界に冠絶するの國となれり、之れ陛下の德に由るものありと雖又た多く賢相を得たるに由れり、其著名なるものには、ピールありパーマーストンあり、ビーコンスフイールドあり而してグラドストン翁あり、翁は年齒正さに八十八にして今尚矍鑠として時に政界に呼號せり陛下治世の重要事件を箇敍せば、第一有名なる穀物條例の癈止あり、以て自由貿易を確立して、世界商業の中心となり、第二、世に所謂クリミヤ戰爭あり、佛國と共に土耳其を援けて露國をクリミヤに敗ぶり、以て地中海の覇權を確保し、千八百六十七年新改革法案を通過して、撰擧權を擴張し、其他埃及を占領し、印度の領地を增加し、亞非利加の殖民地を開拓する等枚擧に遑あらず、英國が陛下の治下に在て如何に發達したるかを知らんと欲せば女皇の初年に於て其面積約五百萬方哩人口一億二千萬に過ざりしもの今や屬領の面積一千三百五十七萬餘方哩人口四億一千八百八十萬人となり、地球表面の七分の一を占め世界人類の四分の一を領するに到り、世に英國領土には太陽決して沒するとなしと稱する大帝國となるに到りたるを見ば、思ひ半ばに過ぐるものあらん豈盛ならずや、而して陛下の之れを支配し給ふを思へば、其尊榮の如何に大なるかを知るべきなり、

文藝

田舍娘の旅（下）

曳馬野　菽子

富士川にきつるに、岸べに旅人多く立てり。かの紳士の馬車もあり。何事ならん、あやしと思ひつゝ、川を

見渡せば、水いたく濁りて、すさましく波立てり。よべの雨にて、橋おし流されたりと、人々のゝしりさわぐ。あさましう、いかにせんと思ひみだるゝに、人々けふは、こゝらにやどりて、明日をまたんといひあひて、たちもどるに、おのれらも、もどりて、また紳士と同じやどりを求めぬ。主人にいつはたるべけんやと、とふに、このまゝにて、雨ふらずば、あすは渡船は叶ふべからんといふ、必ずかとおし返せば、さなりといふ。いまはいかに、むつがるとも、かひなければ、此夜は、此所にと、心定めたれど、なほやすからで、空をのみ、かたみに、ながめて、思ひわづらふに、東のかたより雲いできて、日の光もうすくなりぬ。心もそゝろきて、たゞまどひにまどひぬ。いよ／＼雲のひろごりぬれば、今はえ堪へで、泣かんばかりになりぬ。三人は絶えず、おはしまによりて、空をのみ、あふき、雲よいねと、うち念ぜらるゝを、供なる男は、奥にうちふしつゝ、ひとり煙草、くゆらしゐたり。かたみに顔見合せて、あきれぬ。友の一人、かくてのみ思ひ煩ふとも、出でん雲を防がんすべはあらず、ふらん雨を、とゞめんことも叶はぬことなれば、たゞ雲のまに／＼まかせて、かるたにても弄ばゞ、なか／＼にまぎれなんといふ。さらば試みてんとて始めたれど、心こゝにあらざれば、まくるも、勝つも、つらしともなく、うれしともなし。いつしか、かるたは打ちすてられて、またみな空をのみながめたり。供の男の、あまりに思ひやりなげなれば、空のけしきは、いかにと問ふに、あらかじめ、はかり知られねば、明日には、おのづから知らるゝならんといふ。實にいひがひなの、人の言の葉やと、にくゝさへ思はれて、わびしる悲しさ、いとゞましにけり。夕飯もて來つれど、心ゆかず、男起ちて促かすにぞ、たうべんとするに、咽を下らず、箸つくべきものなし。男ひとりたうべゐたり。三人はま

た空をなかむろに、からすの先だちおくれて、とびゆくも、實にこそうらやましく覺えしか。打しも遠寺のかね、夕をつげわたりぬれば、いかでか故郷こひしからざらん、旅路のあはれすゝみて、皆なみだおとしつ。心も空もやみとなりて、打ちなげかれたり。夜になりて、まどろまんとすれど、いねがての耳に、波音高く響くも、いと心もとなしや。よべもえねられず、またけふの心づかひに、身も心もつかれけん、夜更けてぞしばしまどろむ。ほどもなく、曉のかねに、おどろかされて、起きいでゝ、なかむれば、空のけしきいとよし。東の山のは少ししらみて、横雲のかゝれるさま、えもいはれずめでたし。波のおとはたおたしけなれば、みな、よみがへりたる心地して、荷物など整へつゝ、のゝしりさわぐを、供なる人は、猶いねたり。いぎたなしと思へば、雨戸そうじ明け放ちて促すに起き出でにけり。空は晴れぬ、日もいでぬといふを、そはうれしからんと、おいなういらふも、かたはらいたしや。とかくするほどに、朝食の膳もてきつ。けふは心地よく、たうべ終へたり、いざ出でたゝん、きのふの馬車や來つるといへば、主人きて、こは何事をのたまふぞ今日はまだ渡船いとかたかるべしといふ。あやしきことをきくものかな、きのふは、何といひしぞとせむれば、昨日はさ思ひしかども、今朝は波おとまだ高ければ、ひるすぎにも、なりなばといふ、こは客をとゞめんための、いひぐさなりとしられたり。いそぐ旅なるを、さやはまたるゝ、川邊にゆきて、まことの有樣を見んとて、供なる男に見て來てよとやりつ、こゝにやどりし旅人二三人出で立つをも見たり。かの紳士もいで立たんとするさまなり。男かへりきて、いざ立ち給へ、渡船はとくより始まれりといふ。馬車はとゝへば、かなたの岸にて、またんといふ。されば車にて岸べにはせたり、水の勢まだすさまじ。多くの旅人爭ひて

船にのる。おくれながら、おのれらも乘りぬ。舟のうちには、法師もあり。西行法師の古ごとも、思ひやられたり。四五人の揖取、力の限りにこげども、中流の波、つよくて、船もおし流されんとす。皆色を失ひてまどへる中に、かの法師は口にもの念じゐたり。かゝる折とて、いともたのもし。其功力にや、辛じてわたりはてぬ。されどいたくおし流されて、渡場は、はるかに北になりぬ。皆よろこびつゝ岸べにそひて、上りてまちつる馬車にのる。紳士ものれり。またきのふに、かはらず、いちはやく、馳せ行きて、かげだに見えずなりぬ。ねたしと思へど、とかくいはんも、いひがひなからんとて、念じつゝ空をあふぐに、ふじの山みねの雪もきよらに、麓には雲たなびきわたりて、中空たかくそびえたり。

久かたの空にやらかぶふじのねはふもとにたえず雲ぞたなびく。心にうかびしも、まだ年若くて歌も學ばねば、つゝましさに、語らず。友どちも口ずさみゐたれば、必ずよみけん、されどえいはざれば、とひもせでやみぬ。ひるのころ、三島の驛につきて、紳士やきつると問へば、やどの主人、とく山にのぼり給ひぬといふ。實に心うの馬車やと、今更のやうに、恨みあふもをかし。主人駕籠はといへど、かちにて、のぼらんことの、をもしろげなればとて、こばむを、供なる男、されども少女の足にてはと、おぼつかながるに、心よわくなりて、ひとつを伴なひて、疲れたらんとき、かたみに乘らんとて、出立つ。石をたゝみたる山路を、のぼりそめたる、珍らしう嬉しさ、いはんかたなし。打興じて行くまゝに、供も、駕籠もおくたり。かたへの竹籔に、鶯のなくも、いとめづらかにこそ覺しか、やう〳〵足つかれそめにければ、休みつゝ人々をまつに、乘りたまへと、すゝむれど、互に、ゆづりあひて、えのらず。あながちに、すゝめられて、おのれまづ乘

るに、忽ち心地あしうなりて、え堪ふべうもあらねば、おりて歩むに愈えたり。友の一人かはりてのる、絶えて心地あしからずといふ、あやし。友どちは、かたみにのれど、おのれは遂にえのらず。いたく疲れたれば、美くしきけしきも、よそにのみ。峠にいたりしころは日もまだ高けれど、くるしければやどりぬ。おはしまによりてながむるに、湖の清き鏡に、山ながら皇居のうつろひて、水の底にありときく、龍宮とかに思ひよそへられて、をかし、日かげ山のはに入らんとしてさながら水に沈みたるけしき、えもいはれず、きらゝかなり、疲れも忘られて、打ちながむるに、山々きりたちて、水の鏡もくもりはてぬ。入相のかねの音のみぞ、さやかにひゞきはたりぬ。こよひは心安すくいねつ。朝とく起きいで、ながむるに、雲はれたり。これよりは山も下りとなれば、かちのかた、をかしからんとて、人ひとりやとひて、荷負はせて、いでたつ。日かげうら／＼と登りて、かへり見すれば、富士のかげ、さかしまに、湖におちたり。みな立ちとゞまりて、めであひぬ。ゆく／＼見渡せば、山々のきりはれゆきて、隣の國々のながめ、めもはるかなり、きのふに引きかへて、けふは歩みも、おのづからすゝめばか、はや小田原の里は見えぬ。荷物負ふ男の此坂にて山は終るなり。こを泣き笑ひ坂となんよぶといふ、そはいかなるゆゑかと問ふに、上らんとする人はこゝに泣き、下らんとする人は、こゝに笑へばなりといふ。實にこそよくもつけゝる名なれとて、皆々わらふ。これより車にて、國府津につきて、始めて汽車といふものにのる。山は走り、畠はかけり、電信柱は飛び、家は舞ふ。鳥は空にとゞまりてえ動かれず。こはそもいかなる天地ならん、萬物みな、すぎこし國々に異なりと、驚き、がつおぢまどふまに、都にきにけりとて、のゝしりさわぐ人々につれておりつ。まことや、しばしのまに、

都には來りつるなりけり。かゝる事には、鳥の翼も、いかでかと、ひたすらに感じあへりし昔もありき。

ぬばたま

秋葉女史

降りみふらずみさみだれのいとなごりのふ晴れそめて音も志めりたるつま琴の志らべもきよくすみ渡る小川の水も志づまりてあたりさみしき夜な〳〵に日めもすなせしそのわざの小さき胸にうかびきて手にとるふみもわきがたくもの思ひにつかれはて思はずむすぶ友の夢。いづかなるらん夜な蛙夏をつげつゝ誇り音に志ほるゝ妾を園に呼ぶよばるゝまゝにいで見れば木の間をもるゝ月影のいともあはれにかすかなり雲井はるかのかなたより白き衣を身にまとひみるさへきよきおとめでのこなたをさしてくだるよとみるまにきえて姿なきふしぎやのこるたまづさをいぶかりつゝもながむれば

よき花園にやしなはれ、
朝な夕なに水そゝぎ。
そのあかつきをまちのぞむ、
めぐみゆたけき師の君の。
心の底もくみやらで、
花咲くときはいつなるや。
思へばおろかのかぎりなき、
もしも心のあるなれば。
月の都をまとふなら、
心の駒にむちうてや。

くりかへしまたくりかへすこといくそたび思へばかなし我が心胸にうかぶはかの乙女ちりとあくたの浮世より遠くはなれてわびずまひ去年の文月の夕まぐれきれてくやしき玉の緒のいとしやたえし友どちと露だにまがはぬかの天女ひとめみたしと思ひつゝふと大空を眺むれば今や雲間にかくれんといそぐ月をば呼びとめて

我が友どちのありかをばおしへ給へととりすがるかなしやその手をふりきりて御身のたづぬるおとめをば我が都のものなれど今はあはすることならじそなたはほまれのこせしか花咲かなくになにとて香りはなつべき學びの道にいやすゝみ笑をたゝへしそのおりは君がてひしの友どちとにほふ梢にやどらばやと云ひも終らぬ心根を知るや知らずや浮雲のきよけき姿うちかくしまたもや降りくる涙雨。

小説

山むぐら

太田玉茗

（一）

此處は川越の町の在で、兄が妹に話した如く、二人は不幸な孤兒である。兄は其名を健三と言ひ、妹は其名をお峰といふが、お峰が生れた年の暮に、父は病氣で亡くなつたので、妹は勿論其兄さへ、顔もしかとは見覺えが無い。母は二人の子と一緒に、或事情から借金まで、後に遺されたものであるから、何卒返してしまひたいと、女ながらも奮發して、蠶兒を飼つたり絲を操つたり、綿を繰つたり機を織つたり、出來得るだけは稼いでゐたが、足手纏ひの子があるので、思ふやうには働けもせず、さりとて頑是ない二人の子を、人手に渡すも可愛想で、其又行末が心配であるから、夜を日に代へても勤めたけれど、利足にさへも追はれる始末で、遺産も家作も債主に取られて、遂にあはれな其日暮しの、悲しい身の上となつたのである。

子供は年々に成長する、其敎育は忽諸にできぬ。で、健三を八歳の時から、村の小學へ通はせたが、元より貧窮の身の上であつて、住居も雨漏るあばら屋であるし、着物もあまり美くしくない、そこで友達は健三を

侮どり、又健三を辱しめて、貴樣の家にはこれがあるか、かれがあるかと意地惡く訊ねて、あるなら見せろ、無いだらう、僕らの家には澤山にある、なあ君、君の家にも澤山にあるなあ、健ちやんの家には無いのだとよ、口惜しいだらうと嘲けり笑つて、よるとさはると散々にいじめる。

健三はいつもむら〳〵涙で、母に其事を物語つて、家でもお買ひよお拵へよ、皆人が無いと馬鹿にするからねえお母樣と取縋るが、母は餘裕の更に無いので、我子の不愍に涙ぐむでは、お金が出來たら買つてあげる、澤山拵へてあげるからね、何と言はれても辛抱おし、今無くつたつて勉強して、お前がえらい人になれば、そんなものなどはいくらも出來る、闕はず精出して勉强おしと、說いて聞せて又なだめる。

妹の友達も親々より、かねてあの子は貧乏人の娘だ、あんな子などゝ遊むではならぬと、言ひ聞されてゐるものであるから、子供の事故遊びはするが、いつもいじめて泣かせるのである。母は瞋意の焰をもやして、貧ほど口惜しいものはない、貧すればこそ子供までが、つらい悲しい目をするとて、只管家業を勉强する。

年齡も行かぬ健三ではあるが、母のいふ事を能く聞き分けて、毎日學校へ通つてゐたが、其學友は蛇蝎の如くで、顏を見るのも可厭であるから、言葉を交すはまれ〳〵であつて、いつも仲間をはづれてゐる。母は健三に妹を痛はれ、妹は人にいじめられる、意地惡子供に泣かせられる、仲よく遊むでおやりといふので、妹のお峯が手を曳いては、野原で茅花や菫を摘み、蜻蛉や何かを追ひなどして、二人で睦じく遊むでゐる、妹が兄樣〳〵と慕へば、みいちやん〳〵と兄は呼むで、恰かも番ひの蝶の如く。

それにいくらか慰められて、母は我身の勞力を厭はば、我子の生先を樂しむでゐた、然るに風邪が原因となつ

て、兄は十二で妹は八歳の、二人の子供を後に殘して、返らぬ旅路に赴いたが、臨終の際に健三に向つて、お前は家の相續人だから、平生お母樣が言つたやうに、何でも勉强をよくしてね、何卒えらいものになつておくれ。それからお峯を可愛がつて、いまに世話してやつておくれよ、可いかい賴むと繰返した。

元來此家の一族には、骨肉といふもの更にないので、生活はいよ〳〵困難になる、病氣は日に增し重くなるそこで同村の孝作といふ、親切者の一人の老爺が、寡婦を頗る不愍に思つて、見るに見かねたものであるから、心を盡して看病して、其枕邊に附添ふてゐた。健三も子供に似氣なく坐つて、又かい〳〵しく看病する。母は苦しい呼吸の下から、老爺に幾度か禮を述べて、あなたも御渡世に忙しいところを、かうしてお世話くださるとは、誠にありがたうござりまするが、それでは痛み入ります故、どうぞお關ひくださりますな、唯折入つて願ひまするは、二人の子供の身の上です、何にも骨肉がございませぬから、妾が無い後はお世話をなすつて、何處か相應なところがあつたら、兄は年季に妹は養女に、どうぞ御周旋くださいましと、くれぐれ賴むで死むだのである。

老爺は貧窮の身の上であるが、兎に角後を懇ろに弔らひ、二人の子供を家に引取り、人に遇ふ度涙を流して、誠に不運の兄妹ではないか、哀れな不幸な孤兒ではないか、養女に欲しいといふものがあつたら、妹はどうぞ其處へやりたい、兄には商法が習はせたいから、商家の年季に出したいのである、相應なところはあるまいかと、口を尋ねて口を求める。

妹は元より可愛い娘で、兄はさかしげな子であるから忽ち相應な口があつて、妹は多摩郡の青梅在の、或豪農の養女と定まり、兄は東京日本橋あたりの、小間物問屋の年季と極つた。

老爺は二人の睦ましいので、別つを不愍とは思ふけれど、自分で養ふ資力もなければ、手許におくべき餘裕も無いので、或日健三を呼むで言ふには、お前も今年は十二だから、もうこれ直に一人前の男子だ、親が無いつて差支ない、年季に出ればそれで可いのだ。何でも年季に行つたらばの、主人や番頭の言ふことを聞いて、へい〳〵はい〳〵と立働き、商法の道を能く覺えて、いまに立身しなければならぬ。立身すれば百姓とは違つて、大きな身代になれるからな、よく辛抱をしてくんなよ。己わもう直に眼を瞑つて、墓場へ入る老人だから、こんな老爺をあとにせぬで、よ、健坊。若しもお前が惡い事をしたり、言ふ事聞かないで逭ひ出されると、何處へも行きはが無いのだから、能く辛抱をしてくんなよ。みいちやんも餘所へ貰はれて行くが、決して遇ひたがらないが可いよ、大きくなれば遇へるのだから。可いかい。しつかり覺えてゐてくんなよ。」

健三は何だか心細いやうな、悲しいやうな感に打たれて、少し眼瞼に涙ぐむだが、又其未來は賴もしいやうな、嬉しいやうな心持がして、それでは伯父樣いつ行くのと、氣を取直して老爺に訊ねる。老爺は明日だと對へたので、みいちやんはいつと又尋ねる、みいちやんも明日だと對へたので、さうかいそれでは一緒だねと、すぐに外面へ飛び出したが、子供ながらも亡母の墓前へ、別れを告げやうとしたのである。

談叢

苦樂（上）

勝間禪夢

英國の僻邑にゼオドールと呼べる少年ありき、所行まめ〳〵しきに性質さへ賢かしきは、天晴末賴もしき少年なれど、惜しいかな、玉にも傷の不足と言ふは、心のおだやかならぬことにて、動ともすればうち腹立つ

る痼癖ありき、若し少しにても己が心に染まぬことの出で來れば、前後の思慮も無く、顔赤らめて罵しりちらし、果ては職業をさへ投擲ちて荒れ廻はり、燃え立ちたる怒の容易に鎭まらぬは、さながら狂氣の如くにて、手もつけられぬ燒火箸の、持て餘されし狀態なり、ある日庭園の戸口を開け捨てたるまゝ、閉づるを忘れたることありしに、大小許多の豚の群、機會善しとや思ひけん、遠慮會釋も無く一度にどつと亂れ入りて、散々に庭園の内をあれ廻はりけり、此の物音を聞きつけたるゼオドール、下僕と共に鞭ふり立てゝ馳けきたりしが、早や事の間には逢はで、無慘や蕾持つ草、二葉出初の若木をはじめ、有りとあらゆる野菜青草のたぐひまで、豚の狼藉に跡方もなく、蹈みちらされ、喰ひちぎられ、地上に列を亂して倒れたる樣は目も當てられぬばかりなり、中にもゼオドールが朝夕の手當に丹精籠めて、寵愛深かゝりし薔薇の木の、枝折れ葉むしれて、元の形を止めぬにあきれ果て、腹立たしさと口惜しさに、暫時は言葉も出でず、茫然として立ち居たるが、憤怒の痼癖、むら／＼と念頭に發して、落膽の末の自暴ごゝろ、傍に置きたる鍬の柄を、見るより早く手に握み、こたびは自身獅子奮迅の狂と成りて、庭園の面を堀りちらし、搔きあらしたる末、尚ほ飽き足らはで、恙なき植木さへ引拔きて泥土の下に葬り、拳ふるつて口惜しき泣顔見せつ、やうやくにして庭園を立ち去りぬ。

ゼオドールの父カールトンは我子の手荒き擧動を物の影にて眺め居たるが、子を案じる親の心の常として、若しも此のまゝに捨て置き、短氣を改むることの無かりもせば、成長りたる後、悔ゆとも及ばぬ不便の目に自ら逢ふは必定なり、行末は花も咲き實さへ結るべき大事の身の上なれば、若木の內に邪曲枝矯めざるべからずと、思ふも親の慈悲にて難有し、其日の午後カー

ルトンはゼオドールを誘なひ、親子共々袖振りはへて、若草の萌え立つ野邊を、彼方此方に漫歩きして、只有る百姓屋のほとりに來りぬ、此の家の周圍には目も及ばぬほど廣やかなる畑ありて、未だ鋤鍬の齒さへ入らぬ處もあれど、概ねは耕作行き屆きて靑き葉の風にゆらめく樣見るからに心地よし、畠の所々に蒔きたる豌豆の、今を時得顏に花咲きたるも惡からず愛らし、家の後に種々の菓樹植えたる鮮かの畠あれば、又前には時の花を數限なく飾付けたるあでやかの庭あり、薔薇の生垣に忍冬の蔓を態とならず這わせしも風流なり、垣根の隅に設けたる蜜蜂の巣臺、豚と鷄とが友連立ちて樂しげに遊ぶ畑、乳房下たる牛の、乳しぼらるゝ小舍など、一として面白からぬもの無く、物として主人の人となりと仕配の宜しきとを現はさぬはなし、ゼオドールは此の狀景に漫ろ心を動かして、如何なる人の家なるかと父に問ひたり。

「此處はハードマンといふ人の家なり、我此家の主人と親密といふにはあらねど、互に顏知り合ふ間なれば道の序に立依りて主人の面白き談話聞き行き、今日の苞苴にするも惡くはあらじ。」

と言ひて進みゆく父の跡に從ひ、此の百姓家に入りて主人を訪なへば、主人出來て心よく二人を坐敷に招じ、疎かならず待遇しける、軈て父のカールトンは言へり。

「ハードマン主、我は御身の履歷の梗概は聞きつれど、委細しき事を承らぬはいとゞ口惜しき極なり、願ふはハードマン主、御身の物語を我と我子の爲めに殘らず語り聞かせ給へかし、我等の仕合此上なければ。」

「哀哉、我不幸にして、御身等に話す程の面白きこと一つも無けれど、折角の御所望ももだし難しされば我幼少の頃より世の中に味ひし苦勞の話にても御耳に入れ申すべし」

「そは難有し、我等親子は謹んで御身の話を承るべけ

れば、御身が先の日の苦みより今日の盛榮を得給ひたる、其の長き因緣を包まず語りきかせ給へかし。」

「されば聞き給へ、カールトン主、セオドール主、我が家は元と相應に土地も所持して、裕に暮したるものなり、子として親の非をいふは誠に忍び難きことなれど、我父なる人の分別乏しくて家を治むるの道に疎く、朝夕體を酒浸にして飽くことを知らざりし爲め、坐して酌めば滄海も盡くるの道理にて、さしもの家も瓦解始めて、廣かりし田畑も暗々人手に渡り、家の道具も殘りなく賣拂ふやう成りて、淺ましくも落ちぶれ果てけり、間も無く父には死なれ母にも別れて、天外孤獨の身、寄邊の岸の浮木にも取着き得で、さながら盲龜の滄浪ふが如く、路頭に迷ふて乞食の眞似までなしけり。」

「其後程無く叔父なる人の、商船の司を爲たるが許に引取られて、養はるゝ身となり、三年が程を叔父の船に丁稚の務めして、板子一枚が此世の境といふなる船乘渡世の常、危き目にも幾度か逢へり、されど馴るゝに從ひ海上の快味も知り、叔父には殊ら可惜がられて給金さへ次第に殖えければ、我も叔父の爲めには身を粉にして、甲板の上に立働きたり、さるに不幸は忽に起りて、あはれや我船モロッコ沖に覆り、叔父も水夫も底の藻屑とはかなく成りて、助かりたるは我が仲間のみなり、我は浮べる板にすがりて辛くも陸の岸邊に流れ着きしは着きしものゝ、野蠻の土人に捕へられ、惡くや此身を奴隷となし、卑しき酋長の前に膝折伏する腑甲斐なさ、夜晝重き仕事を負はせられ、湯も水も供はれで、鞭に驅られて追ひ使はるゝことの悲しさ口惜しさ、察し給へやカールトン主、此時の思ひは今に何忘れぬぞかし、さりとて身を購ふ代金もあらねば、唯だ唯だ機會を待つより外に手段も無くて佗び暮らし居たるが、此の苦痛に得堪えで、仲間のものは追々弱り行きて、遂には死に果つるものさへ出來たり。

群書解題

女訓の書（姫鏡）

欲東翁

女禮式、これは餘程古きもので、足利時代の末つ方には、早や盛んに行はれ、伊勢、小笠原、斯波、細川、今川、曾我、武田なんどゝ、幾つにも別れたる、流派のおの〳〵、いづれも門を張り、家を立てゝ、其頃一般の女流社會を、敎へ、導びき、そして戒しめておつたものである。ところが、この女禮式、それに伴なふて行くべき、女訓の書、即はち女の守るべき道、婦のなすべき行ひなどを、懇ろと說いた書物といつたら、其時分、まだ一つもなかつたです。

其後多くの年を經て、德川の盛世所謂天下泰平の時に至りて、これ等女訓の書が、始めて出ました、そしてそれから段々と、幾種も幾種も、數多く出た、皆德川の時代に出た。

女禮式、それが足利の時代に出て居ながら、たとへば、それとこれと、車の兩輪、鳥の兩翼ともいふべき、女訓の書が、何故に其女禮式に伴なふて、足利の世に出なかつたか、よしまた足利の世に出ないにしても、それについだ、織田の時代、または豐臣の時代などには、なぜ出なかつた、如何いふ譯で出なかつたか、その譯、それは中々込み入つて居る、チヨツと、言ひ盡くすことが出來るほど、手短かいことではない、ですから、それ、其譯、こゝにはそれを言ひますまい、また折りがあつたなら、別つに詳しくいふとして、まづ、茲に揭げたる、本題についひて話しませふ。

ところで、その數多く、德川の時代に於て出たるもの、種々の女訓の書物、極々近い時に到るまで、女一般に用ひ來りましたもの、その書目をあげて見ませうに、

女四書（七巻）女小學（一巻）鑑草（六巻）姫鑑（三十巻）本朝列女傳（十巻）女訓抄（三巻）藏司百首（六巻）本朝貞女物語（二巻）婦人養草（一巻）婦人ことふき草（十巻）いなご草（六巻）小兒育草（五巻）

この外に、また、

古今集（二十巻）百人一首抄（三巻）三十六歌仙（一巻）など、勿論、徳川時代に出たものでない、今更それを、ことはるだけか愚である、これ等の古書、これを又、補ひとして用ひた、女の訓として讀ませた、考かへて見ると少々おかしきこともあるが。

そして、かの、源氏物語だの、落窪物語だの、又、伊勢物語だのいふのは、いたづらなものだといふて固く禁じた、一切讀ませなかつた、古今集、百人一首、三十六歌仙、なんど、多くの戀歌など、なんとも更にいはないで、咎めもしないで、隨分妙な理窟です。

其外にまた、女學範、女訓三才圖解、女今川姫小松、女用文指南車、女敎訓書操鑑、女中庸瑪瑙宮、なんど、皆此種に屬すべきものであります。

いづれも、いづれも、今から見れば、兎角の評はまぬかれない、それは其筈、最もの譯、まつたく、時勢の然らしめたものであります、だから、その批難、それは其樣々の書物、それの罪でもなく、またはそれを書いた人、即ち作者の知つたことでもない。

その事をいはう爲め、左の抜書、

黑棚の飾りは、上段に短冊箱。中には硯箱。右に、文庫をかざるなり。又中段には姫鑑、貞女物語、その外に歌書類を飾るなり。下段には、つのだらひ、わたしがね。中に、石の箱、左に、十二組入の化粧道具をば飾るなり。

夫れ、女子は、生涯人に隨ふべきものなれば、父母の許に在る間、正しく敎へざれば、宮仕にも主人の心に應ぜず、嫁入しても、親夫の意に從はず。遂に

は、身の倚る邊を失ひ、あらぬさきに零落し、父母親族までの恥をのこす。是れ何の故ぞ。その元は、父母たゞに愛して、敎のなければなり。

これを讀めば、其模様は知れる、其頃の敎育法。その敎育に、尤も多く關係ある、女訓の書物、それが今にしておかしきは、寧ろ至當のことだと思はれます。

ところで、これ等女訓の書物、右に列らべたる其書目、それを一〻、順を追ふて解題しませう、其年代の前後より、むしろ其名の高いのから、其部數の多いのから、そして、其著者の價の高いのから、初めにして、低い方、少ない方、そして其他に及ぼして。

然ういう順序で行く時には、まづ最初、第一番に掲げるのは、元祿の頃に出た、姫かゞみ即ちこれであります。

これ、此姫鑑三十卷、非常に世に用ひられたもの、非常に珍重されたもので、普通一般、上下おしなべて、弘く讀まれたものと見えます。然して、上つ方、いはゞ華族なんどいふ、身柄よき方の姫君達が、緣につきなさる時分など、持てお出になつたといふことです、その書物、別仕立で、名高き能書の人が書いたもの、黑漆高蒔繪の文庫にはいつて、今でも、時〻、古道具屋、古本屋なんどに出てあることがあります。

それ程に、珍重されましたこと、それ、あたりまへ、其筈です、作者がよいのですもの、隨つて中にあるとがよいのですもの、そしてまた、書きなされたる、文章、これがまた、よいのですもの、如何うしても、違つたものです。

其作者は徳川の盛世、元祿の頃はひに於きまして、名高き大儒者、伊藤仁齋、中に有名なものです、この仁齋とまけず劣らず、肩を列らべて、其名をひとしふして居ました、京都の儒者、中村惕齋といふ人の書いたものです、いふまでもなく、婦女敎訓のために、古し

への賢女節婦、和漢、古今の別なくたゞ〳〵多く其類の物語をあつめならべて、これに又、聖語、世諺、そしてまた、訓しめの和歌、いろ〳〵と引用して、論じたり、評したり、樣々に意を盡くして居る、おもふに、彼の小學、御存じでしやう、學校なとて使ふて居た、修身科の教科書に使ふて居ました、朱子の小學、あれに倣ふて作つたものでしやう。

その一斑、それを知らんがため、

酒は憂を忘れ、喜を致すものなれど、好めば過き易く、過ぐれば善からぬ事多し。飲む人忽ちに物狂はしくなる故に、酒の名を狂藥といふ。又、これによりて、禍出來る故に、禍泉とも名く。めでたしと見る人すら、醉ぬれば本性くらみ、或は妄行の端となりて、淺間敷こともあり。殊に、女の人に交り居て、醉ひすさゝひたる果ては、髮亂り、おもてさし出て、人目も憚からず、高らかにものいひ散し、けうとく笑へる樣、いと見苦しくうたてし。管仲が詞に、酒入りて舌出づ、といへるやうに、醉るよりして、詞の咎をとり、大事を漏らすこと多ければ、重く戒しむべきことなり。女論語に、酒は、唯唇を濡はすべしといへり。女の酒飲まずとて事足らぬやうやある。痛く戒めて、ふつと飲まざるぞよき。

暫しが程の醉の樂しみに、さめこの後の永き悔をとゞめや。

其一節だけ、書きぬいて見ればこんなもの、其他いろ〳〵、道は異つて居ても、精神は一つ、すべてのこと、よろづ此主義でもいて、一々教訓したものです、そして、この姬鑑といふもの、これは數多き女訓中、尤も古きものであつて、壺のいしぶみだの、養草だの、それ等はいづれも、これより後とに世に出たもの、自然、まねたところがある、兎も角の評、それはいろ〳〵、あつたにしろ、其出來ばへといふたなら、流石、中村

惕齋の腕、中々うまいもの、近頃多く世に出づる、修身書、倫理書なんどいふもの、比じやありません、誠に再讀の價値がある。

この姫鑑三十卷の中、多くの賢女、節婦、それ等操の正しきものを、羅列した其中に、靜御前をなぜ入れなかつた、靜か義經の爲に盡くしたこと、實に女の手本である、それに何故それを落したかと、室鳩巣が排難した、其隨筆、駿台雜話の中に於て攻擊した、これは外のことではあるが、ことの序にいふておく、その靜を落したのは、即はち其時勢に制せられた立派な證據だ、如何に貞女でも、節婦でも、賤しき白拍子、いはゞ藝者の如きもの、修身書の中に書くべきものではないといふ、其頃の考、それが、これでよく別る、かゝなかつた、惕齋と、かけといふた鳩巣と、其人柄もこれにて知れる、いひたいが、紙面がないあとはこのつぎ。

家政

被雇人の心得

前々號に下女を使ふ心得を記載したるが、寛政二年、大坂京橋通り八軒家兩替商米屋某の召使ふたといふ十四歳になれる少女に、其祖母なつより送りし書簡ありこれは獨り下女の心得に適切なるのみならず、處生法ともなりぬべし

一御主人樣方の事は親よりも大事に侯儘、少も麁末の心なく奉公を大切に勤め可申事。

一御主人樣方の事は申すに及ばず、御傍輩衆の事猶更ら何事によらずとんと陰言申間敷事、

一何程腹の立つ事ありとも堪忍して少も不承なる顔は致す間敷事。

一女は女らしきが能く侯儘、常々心掛立居擧動しと

やがに、疊のへり敷居など踏まぬ樣に心掛け、荒々しき物云ひ高笑ひなど無用の事。

一男たる人々に馴れ〱敷物云ひ致す間敷候、是又若き女の愼みの第一に候事。

一諸事遠慮致し、隨分〱出過ぬやう、利根がましく問ずがたり抔して多く物いふ間敷事。

一火の用心第一に候儘、蠟燭の燈しさし、紙蠋等麁末にならぬ樣に心を付け可申事。

一おいと樣と遊び候とても、何かに心を付け御けが無き樣に、猶又おあがり物など隨分〱氣をつけ可申事。

一朝は早く起き可申候、人樣におこされ候樣なることにては相濟み申さず候事。

一行儀惡く候ては、御奉公つとまり不申候儘、萬事氣を付て御無禮なき樣に心掛け可申事。

一人樣よりは我はたらぬ者と心得可申事。

一仕事を致し候節、針など麁末に致し申間敷事。

一知らぬ事や不調法なる事は、ありの儘に申上て、少もまけおしみ致す間敷事。

一何事にても御尋申上て致可申候利根がましく我しり顏にて仕損じ申間敷事。

一御申付なされ候事は勿論、何事によらず隨分〱丁寧に致し可申事。

一皆々樣の御氣に叶ひ候樣に、隨分と氣かる尻がるに、おとなしく致し申さるべく候、くれ〱も人樣の御事は善惡共にとんと申さぬ事にて候、兎角人樣に憎まれ候ては、中々御奉公は勤まり不申候委敷事は筆に盡くし難く候故とゞめ參らせ候、凡そ右の通り少しにても違ひ候へば、其身の爲め惡しく候儘、深く思ひ厚く愼みて御奉公を大切に御勤め可被成候、ふだん懷に御入置きなされ、每夜〱ねまに入り候て、一へん宛御よみ可被成候

何を御中なされ候哉、夫程の事は私も知て居る抔と云ふ様にては、情けなき心にて候、兎角諸事おとなしく御勤めの程、頼み參らせ候、
めでたくかしく

時雨月十七日　ばゞより

おうたどのまゐる

サラドの料理品々

「サラド」は西洋料理中頗る人意に適するものなり、左に目新しき二三種を記す

（一）「クァベヂ、サラド」……クァベヂ葉牡丹の程よきもの一つ取りて細かに切り四個のよくかきまぜたる玉子と一匕の芥子、一七の冷水強き酢六匕、鹽一七黒胡椒半匕とを錫の罐に入れよくかきまぜ十分間程熱湯中に入れて煮るべし、

（二）「トマト、サラド」……トマト（所謂西洋赤茄子）一斤及同量の芹を取りよく煮たる後火を去りて輕くかきまぜたる三個の玉子に少量の鹽と胡椒と混ぜたるものを入れてよくかき立て少し冷かになりたる後一七の芥子を加ふべし、

（三）葱サラド……若かき葱と芹とをよく刻み鹽と胡椒にて味付くべし、二個の玉子の蛋黄を取り極上撒攬油を滴々灑ぎて「コップ」に充つるに至らしめ後レモンの液を加へよくかき混ぜて衣とすべし、

（四）馬鈴薯「サラド」……六個の程よき馬鈴薯を取りて煮、暖かきうちに皮を去り四個の煮玉子と三個の程よき生たまごとを皆薄く切り最初に馬鈴薯次に葱、次に玉子と層々に積み盛りその上に胡椒をふりかけその後左の衣をかくべし、

衣の製法は

（一）三個の玉子の卵黄、コップ一杯半の冷水、玉子の形ち位の「バタ」、一杯半の砂糖、とを混じて沸騰せ

しめ半杯の酢を加へ絶えずかき混ぜて後ち用ゆべし
(二)一杯の牛乳、少量の胡椒と鹽、一匕の「バタ」とを煮その中に一個の鷄卵と少量の砂糖と入れ少量の酢に一匕の芥子をかき混ぜたるものを加へ、好みに應じて猶幾何の酢を加へ冷かになりて後ち用ゆべし、

苺の最美食法

最早菓物の好時節となりたるが、目下苺の眞盛り、惣して菓物は天より人類に授けたる自然の藥餌にして胃の消化をたすけ人身の血液を清め、殊に小兒の腹に寄留せる蟲類を殺すの妙あり、されば大人も小兒も夏には精神を爽快ならしむる天の賜物なり。
苺は其まゝに食すれば、大なる粒になるほど味大概にて美味ならざれど、最美の食法は苺を洗ひて砂を落とし笊に入れて能く水を切り、蔕を摘み去り、西洋皿に盛り、匕の裏にて能くつぶし、之に一旦煮沸して冷却したる牛乳を加ゆる時は、苺の酸と牛乳の甘と化合し、玆に化學的作用を起こし、一種言ふ可からざる味となるなり、少量の砂糖を加ふるも可なり、大匕にて食すべし、これ苺の食法には簡易にして美味あるものなり。

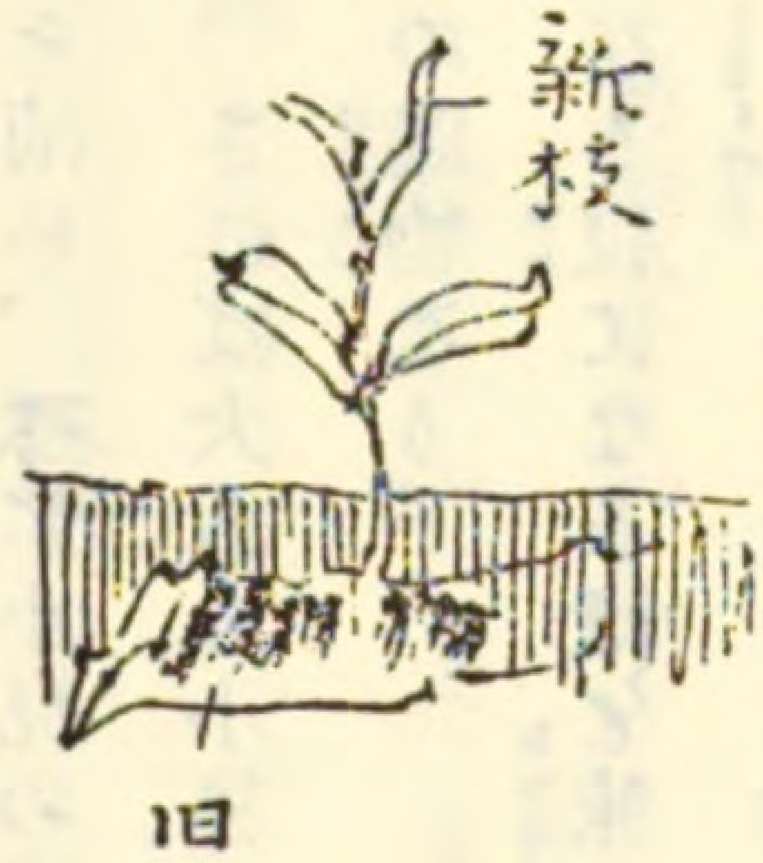
揷木及接木法

四季阿彌

時候もやゝ揷木接木に適する今日此頃。婦人方が家庭の餘樂にはこれにましたるものなかるべし。其法にも種々ありて。其草木の種類に應じ性質を考へ。以て其方法をも撰まざる可らず。(一)餡揷(又玉揷。芽揷ともいふ)(二)撞木揷(三)肉揷(四)挾揷(五)葉揷(六)根揷(七)草芽揷(八)根接(九)腹接(十)揷接(十一)水接(十二)寄接其他壓條法。分殖法。株分法。根塊繁殖法。芽根繁殖法等あり。今左に之を簡明平易に畧説すべし。花卉類に此法を施す時は。一株にして紅白の美花を開き。又盆栽として賞翫する

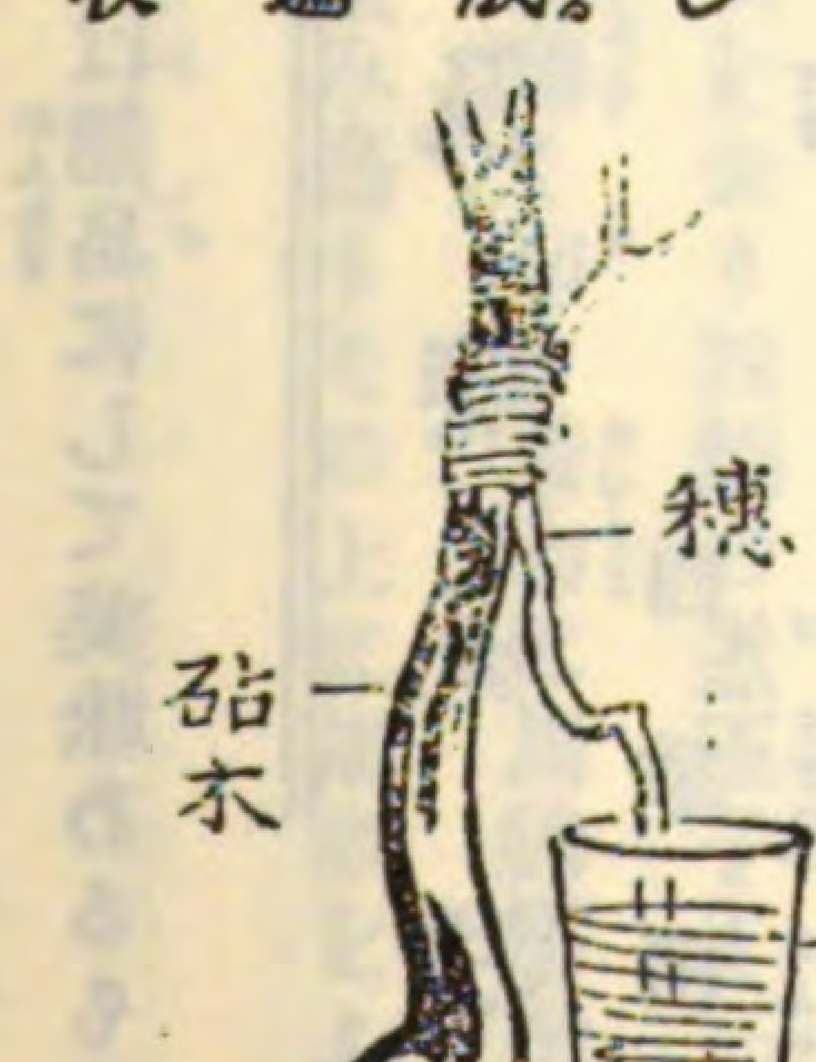
に頗る妙なり。菓樹の如きに至りては。よく澁柿を甘柿となし。梅樹に桃菓を結ばしむるも容易なるなり。これ人爲の天工を奪ふものといふべきか。

(一)餡揷　玉揷とも芋揷ともいふ。唯餡揷は草木の穗を三四寸に切り。切りたる所を能く濕潤したる土に細砂を混和して。徑一寸程の球狀になして包み。これを土中に揷入すると。玉揷芋揷に至つては單に赤土を用ゆるとの相違あるのみ。粘土を用ゆれば草木の性質により。最もよく成功するが如し。



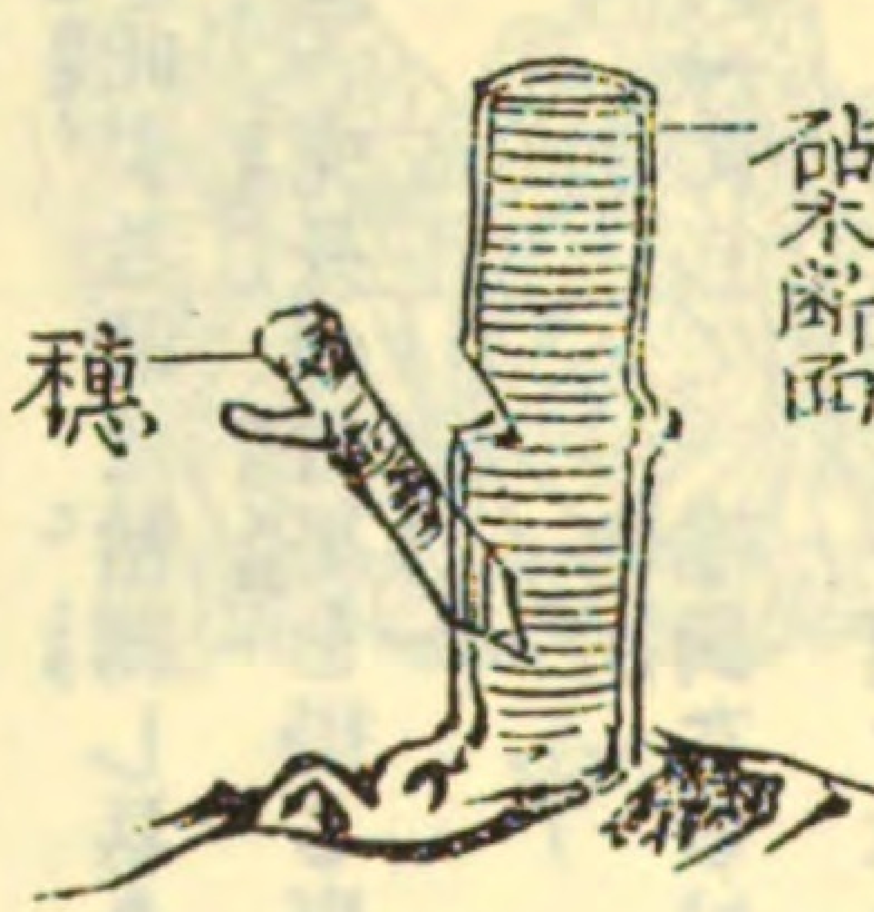
(二)撞木揷　此法は先づ前年發生せる枝にして。又今年發生せる小枝を有するものを撰び。撞木の形の如く。今年發生せる小枝の左右同等の長さに舊枝（前年の發生にかゝるもの）を切り。切りたる舊枝を土中に埋むるなり。此場合には舊枝(一)の土球の作用をなすなり。

(三)肉揷　在來日本に行はるゝ床場を設けて揷木する者に比し。大に簡便なる一法あり先づ春季發芽の節を撰び。揷木用に供せんとせる穗を。其皮だけ半ば削りとりて。其負傷部に粘土を塗り。堅質の紙を以て包み。猶ほ添木若しくは添竹を施して。其上部下部を縛し置くやうにする時は。日を經るに從つて負傷部に木質瘤起するを見るべし。入梅の頃に至り其部分より切斷し。陰地を撰みて揷木し。その充分水分を吸收し得るに至るまでは。成丈け日光の直射を遮り。其やゝ水分を吸收するに至りて。上部に簀張をなし次第にこれを取去るべし。揷木に適せざる樹木も。此法によれば大抵良果を見るべしといふ。



(四)挾挿　椿山茶花等に多く用ゐらるゝ所の方法にして。挿木せんとせる穂の切斷部を縱裂し。粘土の小球を其間に挾み。恰も龍口玉を含みたるが如くし。挿木するなり。

(五)葉挿　尤も堅剛にして老成なる葉を摘み。これを濕潤なる砂土の上に挿す時は。葉の周圍に於ける缺刻より。根叉は莖葉を生ずるものあり。又秋海棠の如きは。彼の太き葉脈よりして發芽し。漸次生長すると頗る妙なりとす。」



(六)根挿　草木幷に此法を用ゆるもの尤も多く。又一番功成し易きものなり。所謂根分と稱するものこれなり。蔬菜類にも一般適用せらるゝなり。

(七)草芽挿　楊柳の如き薔薇の如き其他木質柔軟なるもの尤も此法に適す。先づ芽部を莖中に存じて適宜に莖を切斷し。常緑樹は一葉を存じて切斷し。挿木するなり。是れ亦成切し易き法なり。土質は陰濕を好めども。水分餘りに多き時は腐敗を生ずるの憂あり。

(八)根接　これ多く天竺牡丹柿桑牡丹芍藥柑橘水仙等の宿根草木類に施すべき方法にして。尋常種の根に貴重種の穂を接着せしめて。繁殖をはかるに在り。

(九)腹接　これ普通接木法にして。本邦西洋共に專ら行はるゝ所のものなり。先づ砧木(台木)の先端を切斷し。其の一部分に針に切目を入れ接木すべき穂を楔形となし。其間に插入し。褑片をとつて纒繞し。細若しくは糸類にて緩に猶其上を卷き。可及的其接目に觸るゝ事なきやうになし置くべし。又一法は其接木せる部分より上部一二寸を隔てゝ。本莖の半を切斷し。養液をして專ら接木せる部分を養はしむる法あり。此法によれば菊天竺葵牽牛花類だも接木(？)し得べしといふ。菊の如き此法をもつて一株數種の異花を咲かしむるを

得べしと。

(十)挿接　此法は接穂の勢力薄弱にして。これを切斷する場合には。暫時にして枯凋し易き種類に施すに適す。此法は其接木せらるべき砧木及他の接ぐべき砧木を近接せしめ。挿植したるまゝ局所を切斷し。癒合せしめて相互の流液相混和し。遂に密接するに至らば。接ぐべき砧木の根を斷つにあり。如此する時は枯凋し易き植物も。容易に枯凋する事なく。充分の好果を得る事必せり。

(十一)水接　この法は(十)の場合と同一にして。唯異なるは穂は(十)の場合の如く根を有することなく。其一端を水を滿てたる竹筒若しくは器物中に置かるゝの相違あるのみ。

(十二)寄接　總て楓及躑躅の如く。やゝ木質の堅實なるものに施すに適す。即ち數種を同處に接植して。枝梢を適せしむるの方なり。大躰に於ては挿接と異なる處なきも。これは數箇砧木の勢力をして一莖を養はしむるの方法にして。彼はこれに反するのみ。

此他切接割接搭接鞍接舌接合接壓條法分殖法株分法根塊繁殖法芽根繁殖法等あれども此等は他日を期して説明する處あるべし。

手藝案内

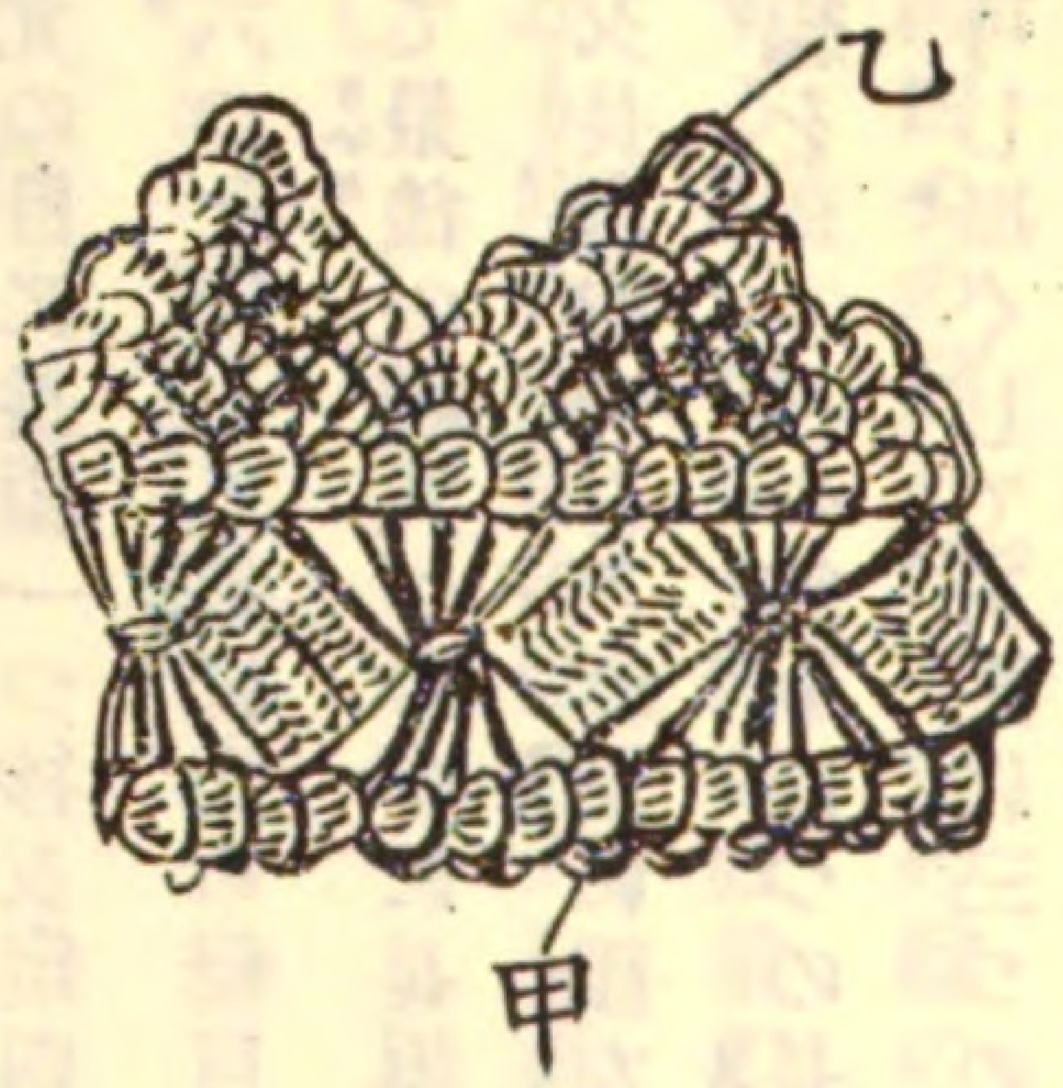
毛絲編物の縁飾

きよ子

テーブル掛肩掛等の飾の内最も新奇のものを説明す可し此編方はレース編なれば花瓶敷又は菓子皿敷ランプ敷等に用ふるも可なり

編方は最初先鎖十八を作り其終りに於て更に三つの鎖目を増三つ隔て長編十一を抄又鎖目十四を作り最初編たる鎖の終りに長編六つを施して止む次は前の表を裏

となして更に鎖三つを施て前の長編中央に六つの長を入れ又十四の鎖目を出し前に編たる長の四つ目に六つ長を入れ鎖一つを増長編の上一つ隔て長編一つを抄鎖一つ増一つ隔て即ち前に編たる終りに長六つを入れ猶二つの鎖目を作り前の如く表を裏になして鎖三つを出し前の長編中央の目に長編六つを入れ鎖一つを増前に増たる鎖目の中に長編一つを入れ鎖一つを出し又長一つを編鎖一つを作り前に編たる長の中央に六つの長を入れて止む更に鎖十一を編鎖三本を中に入れ最初編たる鎖の中央に帽子を以て止め最後に出したる鎖十一に長編四度をなし前の長編中程に六つの長を編順次に鎖一の宛て増長抄三度を編前の長編中程に六つの長編をなし更に三つの鎖を増長六つの中央に同

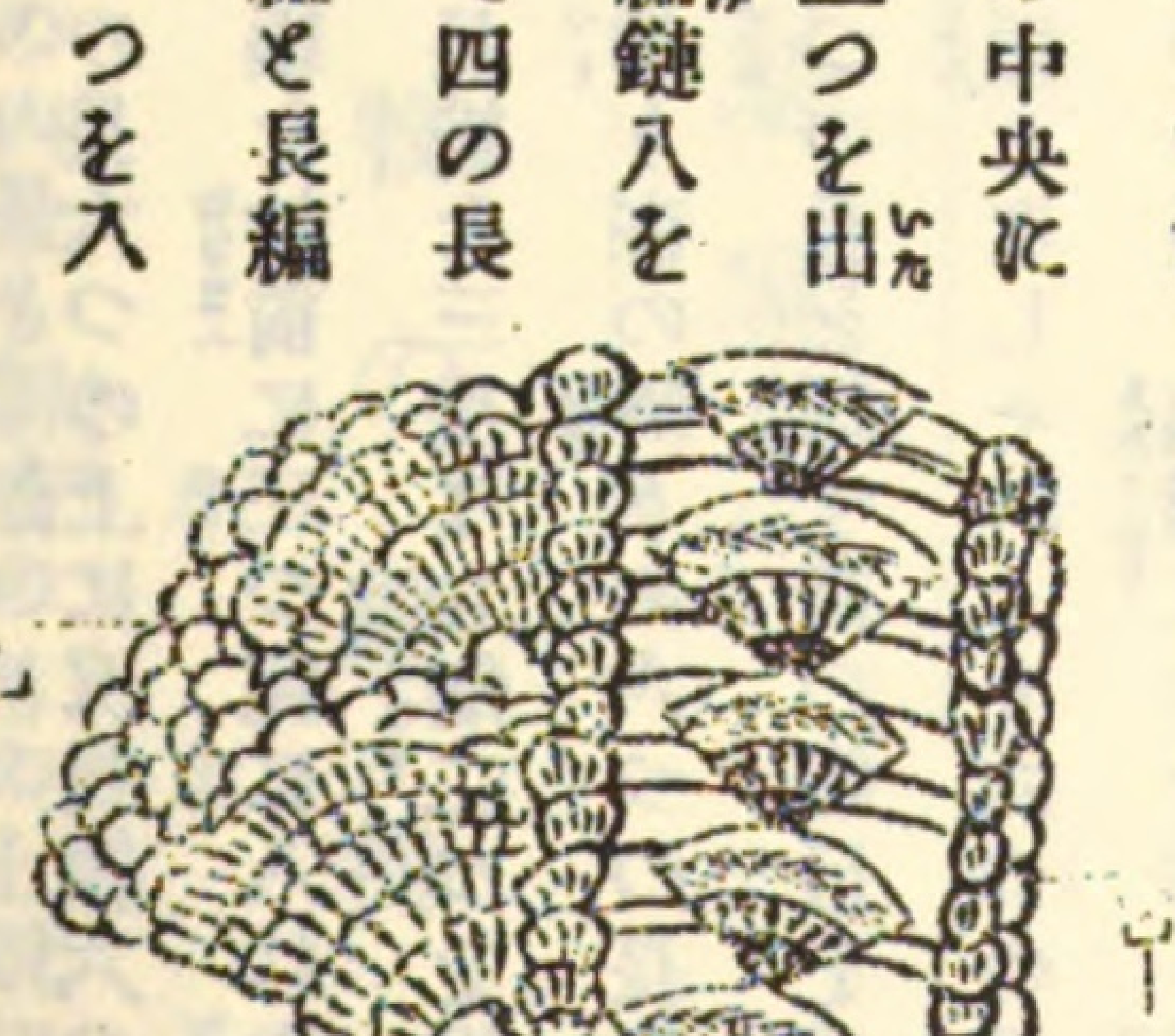


長編六つを入れ前の如く鎖一つ宛増長編と長と間に長一づゝを編可しそれより又長編の中間に六つの長を入れ鎖十四を作りて在りの終りに長六つを編二つの鎖を出し長六つを編猶十四の鎖を出し在の長六つの上に長編六つを入れ次は長と長との間に長編三つをなし次も又三つの長編を入れ前の長六つの上に又長編六つを施し鎖二つを編六つの長編を抄前に三つ宛に入れたる長と長との間に三つ宛の長編を三度なし鎖二つを増六つの長を編十四の鎖目を作り在の終りに六つの長を編別に二つの鎖を出し又六つの長を編十四の鎖目を作り在の長編中央に六つの長編をなしそれより六つの長編と三つの長編との間に六つの長を編鎖二つを作り最後の長編六つの上に長編六つをなし一つ鎖を出し長六つと六つとの間に一つの長編をなし一つの鎖を出し六つの長を編又鎖十一を出し前に編たる長編四角形の一方を帽子編にて止む但し其中に四本の鎖を編込ものと知る

可し以上の如く運びて隨意の尺を得るに至らば之を止めテーブル掛又は肩掛の緣に圖中甲の方を帽子抄にて附終る可し

次は末廣形飾り

初めは例によりて鎖十七を作りそれより更に三つの鎖を編三つ隔て四目に長編四つを入れ五つ隔て六目に長編一を入れ鎖二つを作り元の目に長編一つ抄又鎖四つを隔て長編四つをなし鎖六つを出して終に止め鎖目三つを增前の表を裏になして最後の鎖六つの中に長編十を抄前の長編四つの間に又長目四つを入れ前に編たる長抄二つの中に八つの長編を作り在の終り四つの長目の間に四つの長編をなす可し斯くして又更に三つの鎖を出し前に作りたる八つの長編と長編との間に一づゝの長編を施し七つの長編を得て又前の長編四つの間に長編四つを入れ前に編たる十の長編の間に毎隔一づゝ長編を入れ終りに至らば三つの鎖目を編前の長編と長編との間に毎隔一づゝの長編をなし四つの長編の上にて又四つの長目を編次に前編たる七つの長目の間に三つ宛の長目を編順次に三つ宛の長編を六度編終らば長目四つの上にて長編四つをなし鎖三つを出して又四つの長目を編鎖八つを作りて前に三つ宛編たる長目の中央に一つの長編を入れ鎖二つを出し同目に長目一つを編鎖八を作り前の長目の上にて四の長抄を編それより又長編と長編との間に鎖一つ長編一つを入れ終りまて同樣の編方なり右終らば三つの鎖抄を作り前の如く長目の間に長編一つ鎖一つをなして編行なり斯くて又前四つの長編上に四つの長を編鎖八つを編て前二つの長編の中に七つの長目を入れ鎖八つを出し長四つの中央に四つの長を編鎖



三つを編又四つの長目を編前に七つ編たる長目の間に一目に附て長編三つ宛をなし長編四つの上に同四つの長目を編又前の十編たる長抄一目に長編三つ宛入れて編行なり其上は四つの鎖りを作り下目二つ隔て三つ目に止め斯くして終りまで編四つの鎖を作り前の鎖の中央に帽子編を以て止む斯する事三度なし終らば前の編方にて何尺にても編行くなり附方は甲の印の方を裏より帽子編にて附け終る可し

寄書百珍

家庭的避暑法

西陣　嬌風生

粛呈小子元來西陣ヲへコの一人にて有之日々晨より夕まて職事に齷齪し家庭的避暑法の快樂を味したと無之候得共小子の勞働者として將來實行せんと相考へ候家庭的避暑法を乍覺束可申述候

第一　衣食住を清潔にし衛生を守るは申迄もなく殊に食物に至つては腐敗せし食物を貪らぬやう殊更に注意すへきよ

第二　午前四時より勞働に係り午後七時を以て了りとせよ其中十二時より四時まては勞働を休止すべし是れ一日中晝に暑氣激しき折なればなり、扨て其休息中には家夫たるものは下僕下婢を督促し倶に家内を掃除し亦は庭内に水を撒き家内を清潔になせば涼月は自然と生し各々涼氣を感すべし、ゆめ〳〵晝寝なとを成す勿れ是れ身躰を怠惰に導くの階梯なればなり

第三　行水を採り一日中の汗を流せは天は世人に涼風を惠む是の時一家團欒して晩餐を喫し胸襟を開て相語り彼の小供のために求めたる岐阜提燈走馬燈の下に無邪氣なる愛らしき小児を

相手となし倶に嬉戯する時は身は昔日の幼兒となり都門紅塵の俗界を脱し仙郷に遊ふの心地せん其の爽快なる實女を提携し海水浴に遊ふ所謂紳士的避暑の夢想だも及さる處なり
要は衛生、清潔、和樂の三者にあり先は小子の豫想致し候勞働社會の家庭的避暑に御座候匆々不備

近江　柏原要一

暑きを暑しといふは不可なり暑さを物の數ともせざる心掛あるべし暑しとて海水に浴し又山に遊ぶは心弱き人のする事なり暑さは宜しく家庭内にて避くべきなり終日寒中の心持にて業に務め夕景に汗を湯に流し庭園に水を撒き優然として座し家族と共に庭先をながめつゝ食事をすまし左手に團扇を持ちて徐々ナンセン氏が北極の探險談五稜廓の氷の話などあるべし涼みとて屋外に遲くまで遊ぶは身體に害ある故禁ずべし暫時庭園を散歩し蚊ある故早く寢ねて朝早く起くべきなり之を我避暑法とす

西播　矢野瓜雄

（一）家族の親睦（二）家屋の清潔（三）庭園の植木、床の間の盆栽（四）蕭洒たる裝飾（五）浴衣
是れ吾が家年々實行し來れる家庭的避暑法にして未だ嘗て須磨明石迄出掛くるの要を見ず
今年は前庭後園多くの朝顏と夕顏を培養し盆栽には新たに紅白の蓮鉢二つふへたれば此の夏は一入涼しかる可し、床の間の軸は瀧か海邊の風景かにかへんとぞ思ふ、水色の岐阜燈籠は椽先きに風鈴もまた靑すだれと共に軒端にさげん、樂しき哉

下野　青木生

朝は必ず四時以前に起床し其日の務は遲くも午前十時

迄に畢り諸器物の配置を秩序直くし家屋内は勿論庭園に至る迄一點の塵をも留めざる樣能く掃除し常に心を清楚閑雅にし家族團欒淡泊にして新鮮のものを食し聊も物謂ひ爭ふ如き事ある可らず是れ余が最上の避暑法なり

但蚤一匹にても室内に在りては終夜眠る事不能に依り此點に最も注意すべきなり

社告

引續き次號よりの寄書百珍問題は左の如し

『家庭的避暑法』

如何なる家庭如何なる人にても年々家庭的避暑の最良手段あるべし

曰く湯治曰く海水浴曰く舟遊曰く旅行曰く山遊曰く何々曰く何々所謂家庭外の避暑法は多く且つ世に紹介せられたり

吾社此問題を掲ぐる目的は如何にして容易に、安樂に、愉快に家庭内の避暑法を行ふかにあり

要は家庭的避暑法の最上手段を掲ぐるにあれば一行にても十行にても可及的簡潔なる寄書こそ望ましけれ多種及多數を羅列して愛讀諸君の一燦に供せん

社交一斑

流行の栞

流行子

夏向流行の紙入と銀貨入

紙入は一頁の物にて裏地の無きが現今一般の流行とす、男女共三枚折にて、二見形といふものか、又は日の出形と稱するもの最も好し、形は餘り大にもあらず小にもあらず、男子持にて長さ四寸三分位の處、女子持にて三寸五分位の處宜し、其他男子持には二枚折流行すれど女子には向かず、女子持にては又た四ッ襠形（三枚折の中を合せたるもの）と稱するもの流行すれど、こは多く藝者などの好み用ゆる所にて、眞面目の令閨令孃等には殆ど見受けたることなし、令孃持にて最も上等なるは吾妻

小町のはこせこと云ふものにして、こは其の昔奥御殿の女中より出でたる物だけありて、飽まで品よく優美なれば、目下貴顯の令孃間には大に珍重せられ居るなり、布帛地は、男子物には鰐皮か露西亞皮か又は紋皮、最も男らしくして流行も一番なり、婦人物には繻珍が重にして、少しく金がゝりたるもの流行す、古代書更紗の色合華美なるものか、又は縫箔の書換樣等も流行の上々吉なる事は疑ひあるべからず。

新形の蟇口は其數澤山にして一々記すの遑なけれど、近來殊に流行するは腰差の錢入なりとす、形は印籠を摸したるあれば、煙草入の形を其のまゝ移したるもありて此種類中々に多し、筒には銀がまと眼鏡入との二種ありて、輕便と調法を備へたるは、頗る男子の使用に適し、浴衣出立の夕納涼、緣日のひやかし連なぞには殊に多く見受くる所なり。

新橋の佐竹商店より數年以前賣出したる信玄袋は頗る時好に叶ひて、益々盛んなる流行を來し、殊に女子の方に多く持囃さるれば目下は婦人にして携帶せざるは無きに至れり、布帛地は繻珍、高麗織、更紗印傳等を最も上等とす、この信玄袋は手提革鞄なぞと違い、形狀風雅にして、開閉の自在なるが爲め斯くは流行に赴きたるなり。

奇石根掛玉の流行

これから夏場となれば一般に髮の結振も銀杏返しのやうなあつさりしたものが流行するゆえ根掛玉も大きに引立つやうになり、此頃最も多く目につくは白瑪瑙と蝶具なるが、此外にコンシユク石、キヤツパー、紫水晶、トツパース、支那瑪瑙、孔雀石等の奇石なり、いづれも夏向の使用に適す。

雜錄

婦人矯風事業（二）

ウイラード女史

如何に始りしか

ヘルスボロの祈の隊はオハヨ州知事の娘にて性情才識共に高等なるジヤーシユ、タムプソン夫人に依て導かれぬ而して彼の名高き「クルセード、サム」（禁酒軍詩篇）は夫人の令孃にてその時十八歲なる可憐の乙女が保守的なるその母の斯くも新奇の事業に取りかゝりしは決して尋常一樣の事にあらざるを察し聖書の一ヶ所開きたるを持ち來り

「母上わらわは母君の御爲めに祈りて聖書を開きしにこの詩篇に當りぬこの危急の折に際し恰も母上の爲め神の進軍の令かと思はるゝなり」と喜ひつゝ夫人に捧

げられしに始りぬその詩篇即ち詩篇の第百四十六篇は禁酒軍の「マグナ、チャルタ」(大憲)として各國の禁酒會婦人に隠れなきものとなれり

この最初の隊は早朝一致教會の會堂に集りこの詩篇を朗讀し熱心に神に祈りし後二人づゝ列を組みて優雅温良のタムプソン夫人を先に立て一同に「恐れを風にうち散らせ」の歌をうたひつ最近の酒屋に入り最初の歎願をなしぬ



翌年秋即ち一千八百七十四年の十一月その曾て「ホイキスー」軍に與りたる勇者等に依りオハヨ州クレウランドに於て婦人矯風會は組織せられたり而して今や世界到る處酒類阿片の賣買禁止、學校に於ける禁酒教育、廢娼、婦人の權利等その他凡て同一の主義に基く事業の力となり居るなり

同心の者を集めて婦人禁酒軍を組織し世界巡廻運動の計策は會の通信書記により始めて一千八百七十五年米國婦人矯風會の機關雜誌なる「ユニオン、シユグナル」紙上に掲げられぬ然れども時未だ斯る運動に熟せざりき後七年巡廻演説の爲め我が眞正の同伴者アンナ、ゴルドン孃と共に太平洋岸弁にプゲット、サオンド地方に至りし時牧師ゲブソン博士に伴はれて彼の名高きサンフランセスコの支那街なるものを見たり

其の處にて厭ふべき阿片の魔窟を見たるが隣家には恥の家即ち妓樓なるもの建ちありぬ然るべき支那婦人は夫に伴ふてカルフオニアに來るを許されし然れども其處には即ち幾多の支那少女市街に向ひる窓持てる數多の小房の内に坐して極惡の誘惑を呈し居るなり此の二つの光景一は西洋貧慾の結果一は東洋耻辱の甚だしき

とを目前に見我が心は言ひ難きの感慨に堪たれ惟へらく若しそれ海の遮るあらざりせば支那と極東の海岸は等しく我等がものなるべきをと我等は等しく誘惑多き人類なり白標婦人（婦人矯風會の會員は白き「レボン」をつけて標るしさする故かく云ふ）の天職は宜しく世の母たるもの丶資格を高め家庭の平和と純潔を維持するにあり我等は最早洲縣邦國の人爲の境界により阻隔せらるべきにあらざるなり我等は須らく善且つ大なる古偉人の言ひたりし「全世界は我が寺領善を爲すは我が宗教なり」との言を以て進むべきなり

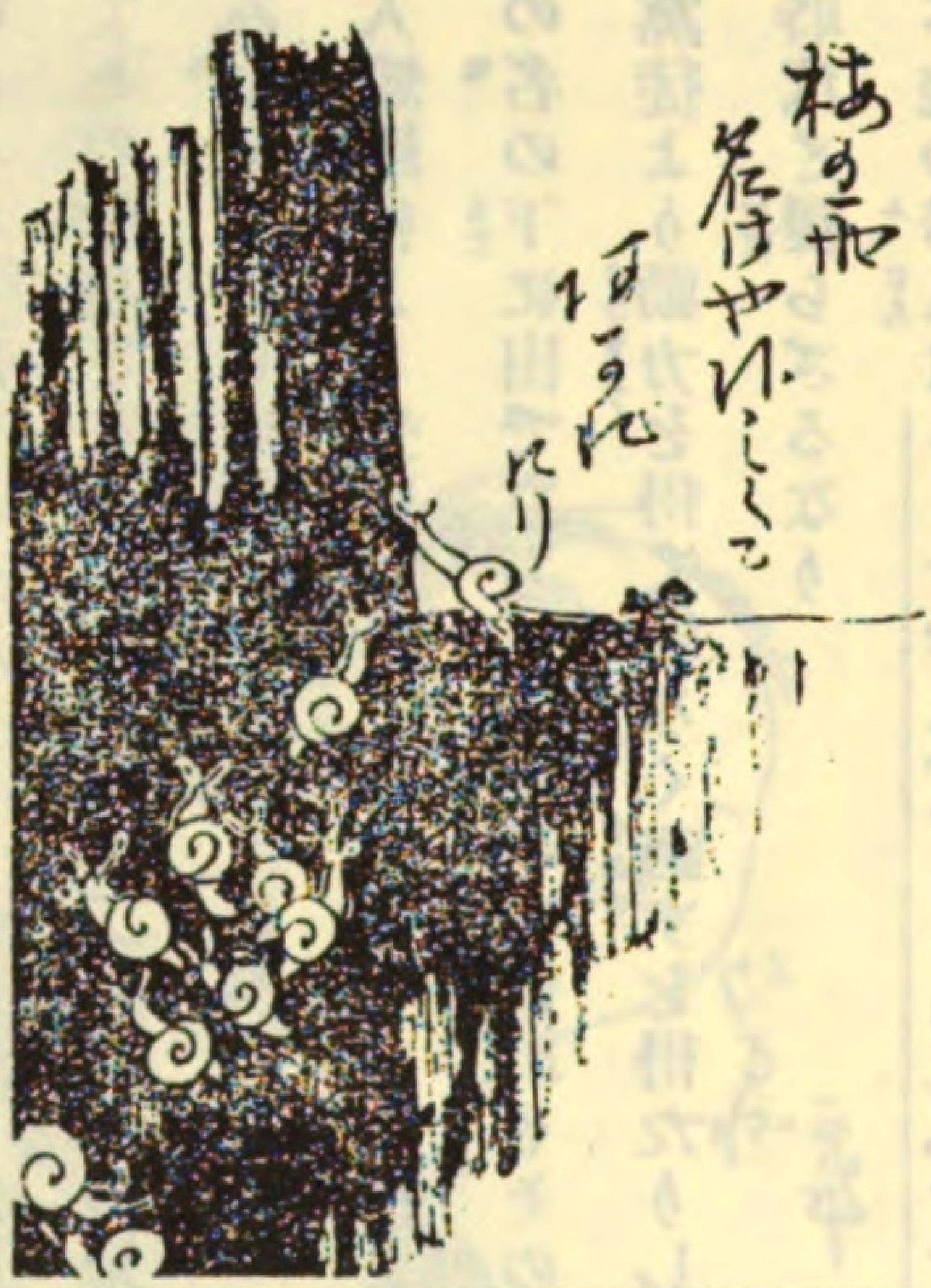
翌年秋デトロアにて開かれたる年會の我が演說に我は此の殊さらなる我が感想を明らかに同役者等に打ち明けぬ彼等は別に熱心にも見えざりしが先づ五人の委員を擇みて何が企てんと約したり

二ヶ月後サンフランセスコの光景我が胸中に躍々たる時マサチユーセツト洲ボストン府のムレー、クレメント、レビツト夫人太平洋岸に赴かんとするに逢ひぬ即ち乞ふに世界巡遊探見の使命を以てせしに心よく肯はれ千八百八十四年の早春サンフランセスコよりハワイ諸島に出帆せられぬ嗚呼彼は勇ましき婦人なりし然らずんば此の事はなさざりしならん彼は献身的の婦人なりし然らずんば會には入費を支拂ふべきの貯蓄すらなきを知りながら此の長途には上らざりしならん



八ヶ年間夫人は白「レボン」を翳ひしつ濠洲、ニユー、ゼランド、南亞弗利加、マダガスカル、テルテ、印度、支那、テレテア、モウレテアス、セーロン、サイアム、ストレート、セトルメンツウス、朝鮮、日本、歐州の各國を巡り千八百九十年英國に、九十

一年米國に歸りその後南米に働き再びハワイ島を見舞ひ一冬メキシコに過し猶數度合衆國內地に巡廻演說をせられたり寔に全世界の歷史中婦人にして斯くも長途の遠征をなし斯くも大なる慈善の効果を得しものあらざるなり



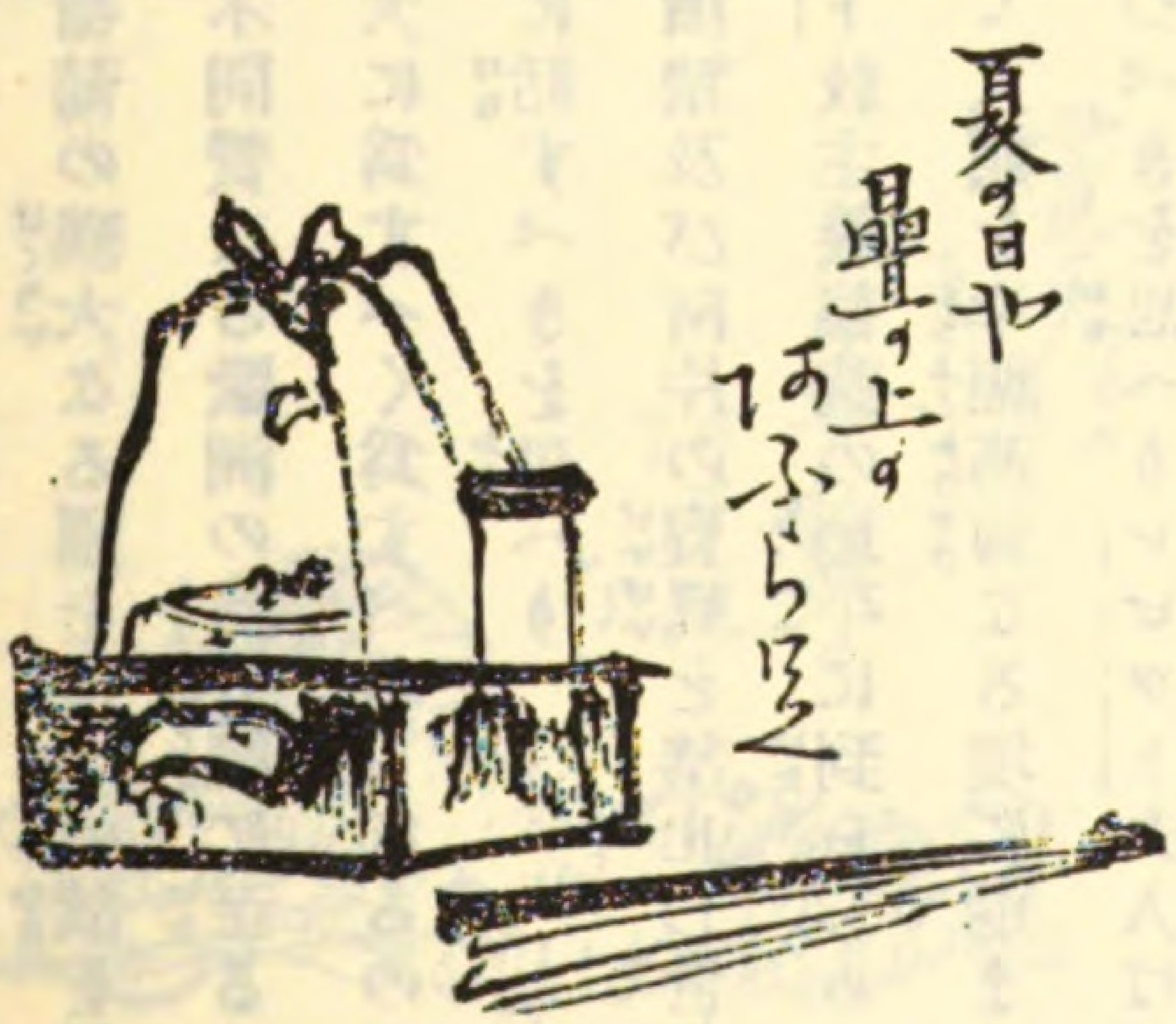
千八百八十五年即ちレビット夫人の出立後一年我が思は遙かに彼が行程を追ふてありし時端しなくも印度支那に於ける阿片賣買の事を記るせし書を讀みぬ讀み去り讀み來りて無限の感想に滿たされ玆に即ち「數國語請願書」を書きぬ思へらくレビット夫人は唯に婦人矯風會の依て起りし禁酒軍のこと、組織の計畫、數萬の忠實なる婦人の胸に結ぶべき白「レボン」熱心を永久に續かしむる唯一の法なる神聖の感觸を起さしむる正午の祈禱等を語るのみならず又別に英、米は言ふに及ばず東洋諸邦、南洋諸島及び濠洲の廣大なる國を持つの故を以て禁酒事業には最も不同贊なる歐洲の諸大國に至るまで等しく與つて共に大に爲すべく爲すべからざるの事に付き到る處の人々に話すべきを思へり

酒精及び阿片の賣買を禁止し世界の形象をしてキリスト敎主義德義の地平に到らしめ一夫一婦の制度を立て丶人類を幸福高尙なる境に進ましむる爲めの請願を建つべきを思へりレビット夫人は到る諸國に此の請願を陳べ傳へぬ千八百九十二年夫人は行きて南米に働き再びホノルフに到り爾來故鄉の各州縣下にて力ある演說に幾多の生靈を感動せしめ傳道禁酒運動の聖なる事業に勢力を與へられゐるなり

レビット夫人に續いて立ちたるは不屈の婦人アックルマン孃なりき孃は千八百八十八年カルフオニアより出立し夫人の足跡に從ふて同一の主義計策に基づき夫人の殘せし感化をして一層深からしめ今再び世界を巡遊して十五萬哩の長程を旅せしのみならず濠洲婦人矯風會を組織してその會長となられたり孃は二百七ケの地方部會を組み立てられしが始めより終りに至るまで一錢も萬國婦人矯風會より受けしことあらざりき然れども神と人類の名の下に出で立ちし使者等は何時もその獻身的なる黨徒より助力を得て難なく過すを得たりしこと猶使徒時代と變らざるなり

以上二人の不撓の婦人はエリサベス、ホイーラル、アンドリユー夫人幷に我が郷關なるイリノイス洲イワンストンの女醫ケート、ブシユテル女史と共に「數國語請願書」を運びつゝ全く世界の巡廻を遂げぬ而してアンドリユー及びブシユテルの兩婦人は主として廢唱、印度に於ける英軍隊の罪法犯違及び支那印度に於ける阿片賣買とその結果等の視察の爲めなりしなり

請願書は五十ケ國の語にて記され婦人の記名男子の公證及び盛大なる會社の裏書等殆んど八十萬の名を聚合するものなり



マレー、アーレン、ウエスト孃は千八百九十二年日本に趣かれたり彼の遠國にて死去せらるゝ數週間以前孃は專心巳が使命の爲め働かれしを以て白標事業の名は不減の印をかの同情深き日本國民の腦中に押し得たり

インデアナ洲のアレス、バーマル孃は南亞弗利加の熱心なる企業家の求めに應じ千八百九十二年の春彼の地

に渡りて殆んど三年彼處に止り會をして堅牢なる基に固かしめたり

萬國婦人矯風會の計策は二種の使者即ち一は視察と感動の爲め一は都合よき限り或る特殊の一國に永く滯在する爲めに派遣せんことを考へ居るなり

如何となれば國より國にと速かに移轉して巡廻するの徒はその巡る各國間に生きたる鏈鎖を造ると共に一國に永く止りて働く人はその國土の氣風、習慣、精神並に道德上の觀念等に能く通ずるを得るを以て完全なる働きの方法を案出するを得るに至るべく最も上策と思はるればなり



千八百九十四年の冬ジヨセフエン、バトラル夫人は萬國婦人矯風會の廢娼部長として以太利に趣かれローマにて有名なる人士の贊成扶助を得猶も大に爲すあらんとせられしに不幸病の爲めその職を辭せられぬ然れども近頃法王レオ八世が英國人民に與えられし書面を見るにその中に彼はその恥づべき飮酒の弊害を禁制する好適の制度及び德義の進達を計りなほ婦人に歸すべきの尊敬を拂ふを勉むる爲め幾多の會の上流社會の子弟間に組織せられしを甚だ悅ぶ旨を述べられ且つ又曰く「そは今や大陸のキリスト敎道德の形勢を視察するに男子は婦人の如く律令の下に嚴しく繋がるゝに及ばずとの有害なる觀念密かに匍匐せんとするを見ればなり」と

天主敎の大法王をして斯く公言せしむるに至らしめたる所以のものはバトラル夫人の偉大なる性情と熱心なるその働の與つて力ありしを疑はざるなり

ノルウエーに於ける伯爵ウエッテル、ジヤルスボルグとその友イズマークデンマルクのエリサベス、シユチー夫人、ホーランドに始めて矯風事業を知らしめたる牧師アダマ、ワン、シユイトマ獨逸に於けるマレー、ウイエラード夫人幷にベルリンのスタチンボルグ夫人、等の矯風事業開道者の事を思ふも樂みなりパリに於ては千八百八十八年ダ、ブロア嬢の下に會は開かれスペインにてはアレス、キレツク夫人スペイン王國中の最も佳景なるサン、セバステアンにて開會しスペインの婦女子に高等なる教育を授くる唯一の學校をも設けられぬ而してアンナ及びバセー、ゴルドンの兩嬢に依り組織せられし靑年婦人會に厚く賛同を表せらる

印度にては最初の會長ジユチツト、ホーサー巡遊して白標者の群を作り幾多の困難を經歴して今や第二の會長フエレブス夫人により繼がれたり夫人は最初ホーサル夫人に依り播かれし種を培養し熱心以て斯業の爲めに盡され最も困難なる印度の地方に慥かなる基礎を築かんとせられゐるなり

實際我等の事業の基底となりし各國のキリスト教宣教師幷に傳道者を一々枚擧するの時あらざるなり彼等の傳道は吾等か爲めに道を開れたればキリスト教の傳へらるに諸國には矯風事業も入り易すし道は吾等が前に働かれたり吾等が事業の働手に先ちてキリスト教を傳播せし幾多の忠貞なる男女は温かく家庭防禦の新教を擴はるに全力を盡されぬ

合衆國英國及びカナダに於ける事業の起因を記さんとぜば各數十の紙數を要すべきを以て故意に畧しぬ合衆國オハヨウ洲のスザウオルド丗堂並に英國のコルガレツト、バルカー夫人は英國婦人矯風會の組織者として永く記念せらるべくレテシコア、ユーマンス夫人はカナダの主なる開道者として知らるべき也

萬國婦人矯風會最初の會頭

ヂヨン、ブライトの妹にして英國婦人矯風會の會長なりしマルガレツト、ブライト、ルカス夫人は六年間（千八百八十四年―千八百九十年）萬國婦人矯風會の會頭を勉められき此は米國婦人の請願に依りて肯ぜられしものなりき、ルカス夫人は慈善及び矯風の事業に全生涯を献げられぬ夫人は唯だに熱心なる矯風の役者なりしのみならず等しく熱心なる婦人權利の主張なりきその新奇にして而かも世界を包含する大運動の會頭に推さるゝや夫人は七十歳の齢を超へしにもかゝわらず大西洋を横ぎりて米國に赴きメチソタのメチアポリスにて開かれたる米國婦人矯風會十二年會に臨席せられぬルカス夫人の婦人らしき温雅の風姿は大に米國の婦人を動してその風貌を慕はしめ殊に老年長途を犯して來遊せられし厚意を深く謝せしめ二ヶ國の交情を温かならしめて遂に千八百九十一年サマルセツト侯爵夫人起るまで及ばしめたり

矯風事業に關する演說の雄大なること凡ての管理る整齊なること恰も政事家の如き偉大なることの侯爵夫人の事蹟を記さんとせば積みて一冊の書となるべし

その位置その富に害せられじ夫人はその鴻大の恩惠を鴻大の事業に聖別しその才能その献身の精神に依り全世界白標婦人の愛慕を得られぬ（ウイラード女史）

歌苑

○松濤窟社中詠草

（池袋清風評）

日前水雞　山口鶴子

小夜ふけてたゝく水雞に柴の戸を
あけてかひある月のさやけさ

評　水雞の戸を叩くたとへ古臭しといへとも唯下半句

夜半戸を開けば案外明月田上を照らすの景を示したる故掬する所あり　前島睦子

うばらちる田川の末に夕月の
影もなかれて水雞なく也

評趣向斬新なるにはあらねど夏夕田上の景情をよく盡けりそは初五にて幽香馥郁たるを示し三、四句には小流に金光晃々として見ゆるあたりに水雞の聲を聞く時は一種幽美の感を發すべし

高原照彦

月きよみ田川の末の水車
見ゆるあたりにくひななく也

評これも前と同じ明月の光にぬれたる水車がきらきらしつゝ旋回するさま見えて亦水雞のなくあり一種の景也

梅雨暗　藤尾春江子

さみだれのはれしあしたの嬉しさは
空のみどりの見ゆる也けり

評別に珍らしき事にもあらねど霖雨に久しく退屈して始て晴天を眺めたる普通の感情を述て實景を顯はせり

篠新樹　市村高彦

花ちりて若葉すゞしき軒端より
さくらの實こそこぼれそめけれ

評櫻は古來花のみいひて實をよみし人なし今始て見る

交詢

◎第壹問（麹町禁酒生（一））來客などありし節我は禁酒否な先天的に酒嫌ひゆゑ待遇上大に不都合あり、此際に何か間に合はすやうな飲料なきやとの問、御尤千

萬なり、此場合には上流社會にて「シャンピンサイダー」下等社會にて「シードル」と通稱する飲料こそ適當なれ、此飲料の味はラム子と麥酒とを混したるやうなれど、毫もアルコート質なければ酒類にあらず水類なり、こは英女皇ヴイリトリヤ陛下が即位五十年祝に當りし節、陛下は禁酒の人にして他に相當の飲料乏しかりしかば獨乙にて發明して之を獻したりとぞ、夏向には殊に佳良の飲料なり日本にては京橋區尾張町函館屋にて賣捌く一瓶(中量だけ)十錢

◎第二問(芝田町齋藤君(一)　愛犬便秘のため苦しみ候よし、犬の便秘は消化し難き頑固の食物(魚骨、或は乾食物)或は慢性腸加答見或は運動不足、或は犬の老齡、或は器械的壅塞(異物、糞塊、骨、若しくは腫瘍の厭迫等)に原因致し候愛犬は如何なる原因なるか知り難く候へ共成るべく消化し難きもの、或は容量の大なる食物を避け、場合によりては絶食せしむる必要あり、或は粥汁の如き淡泊のもの、或は牛乳、肉汁の如き流動物のみを與へ、或は冷水を與へて成るべく運動せしむる樣になさるべく候、微温湯の灌腸も可なるべく候

◎第三問(新潟市富子君(一)　女子職業學校概則を左に陳述致候本校は時世に適せる細君を養成し、女子が技藝を以て獨立自營の資格を造らんと期する目的にして、必竟文明的の婦人となるべき學校にて候科目は裁縫、編物、飾帽、刺繡、造花、圖畫を主とし、修身、讀書、習字、算術、家事、理科に分ち、甲乙の二科に分ち、修業年限は甲科三ヶ年、乙科二ヶ年、甲科年齡十二年以上のもの、乙科は年齡十五年以上にして高等小學校卒業若しくは之と同等の學力あるもの、但し一時に二科目以上兼修するを得ず(たとへば裁縫と編物を修むるものは他の科目を修むるを得ず、然れども二科目を卒業の上は隨意)束修は甲科金壹圓乙科金五十錢、授業料は甲科一圓三十錢、乙科金八十錢、校長は手島精



一氏、職員には婦人多く、生徒は現今七百名以上なり

◎第四問（芝KO君へ）　世に厄年と稱し男子は二十五歳と四十二歳、女子は十九歳と三十三歳を言ひ傳ふるが果して學理に適せしや否やの問、交詢子惟ふに必らず多少の眞理より起りしものならんか、何となれば男子の廿五歳以前と女子の十九歳以前は（男子と女子とは身軀の發達上に遲速の差違あり）所謂青春にして壯年の時代に身軀の組織一變せんとする時期、又男子の四十二歳、女子の三十三歳は壯年より漸く老境に入らんとし身軀の組織一變せんとする時期なれば、此際身體に異狀を呈するが故に病疫に罹り易く、亦重病に陷ることあり、此老年の前後に大病に罹り又は死亡す

等親は一等（父母、子）二等（祖父母、兄弟、孫）三等（曾祖父母、曾孫、甥、伯叔父）四等（高祖父母、玄孫、大伯叔父、從兄弟、甥の子）五等（甥の孫、從兄弟違ひ、從兄弟の子）六等（再從兄弟、甥の曾孫）而かして古來不幸なる際謹愼すべき忌服の日數は父母（忌五十日服十三月）養父母（忌三十日服百五十日）嫡母（忌十日服卅日）繼父母（忌十日服三十日）夫（忌三十日服三十日）妻（忌二十日服
十日）嫡子（忌二十日服九十日）末子（忌十日、服三十
養子（同上）夫の父母（忌三十日服百五十日）祖父母
上）高曾父母（忌十日服三十日）伯叔父母及祖父
十日服九十日）兄弟姉妹（同上）異父母兄弟（
十日）嫡孫（同上）末孫（忌三日服七日）曾孫玄

チメ千筋のアメキニて縦……
配して縦に通して縞目となる……
りは元の裳脚となるなり
◎第七問（丹後宮津君へ）　男子服に其筒の縦縞中縞を第一等の流行とし、其釣合は古代模様或はくつし模様（たとへば牡丹くつしの如く）近來は横縞頗る流行を極む、但し選は意氣の趣ありて高價にはあらず、價格は登圓内外、日本橋區通一丁目白木屋、同區駿河町越後屋等は流行向新柄を販賣す、前號百三號社交一班の部を參照あれ

●寄贈謝金　本誌に掲げたる那須野育兒院星園の記事につき篤志家大阪安藤直三郎氏より金壹圓同園へ寄贈せらる



道問へば一同に動く田植かな

一氏、職員には婦人多く、生徒は現今七百名以上なり

◎第四問(芝KO君へ)　世に厄年と稱し男子は二十五歲と四十二歲、女子は十九歲と三十三歲を言ひ傳ふるが果して學理に適せしや否やの問、交詢子惟ふに必らず多少の眞理より起りしものならんか、何となれば男子の廿五歲以前と女子の十九歲以前は(男子と女子とは身躰の發達上に遲速の差違あり)所謂青春にして壯年の時代に身躰の組織一變せんとする時期、又男子の四十二歲、女子の三十三歲は壯年より漸く老境に入らんとし身躰の組織一變せんとする時期なれば、此際身體に異狀を呈するが故に病疫に罹り易く、亦重病に陥ることあり、此老年の前後に大病に罹り又は死亡するもの丶多きは其實證なり、我國にて厄年といふは學理より來りしにあらざれど、經驗より起りしものなるべし

◎第五問(本所、秾子君へ)　等親と忌服の答左に、

等親は一等(父母、子)二等(祖父母、兄弟、孫)三等(曾祖父母、曾孫、甥、伯叔父)四等(高祖父母、玄孫、大伯叔父、從兄弟、甥の子)五等(甥の孫、從兄弟違ひ、從兄弟の子)六等(再從兄弟、甥の曾孫)而かして古來不幸なる際謹愼すべき忌服の日數は父母(忌五十日服十三月)養父母(忌三十日服百五十日)嫡母(忌十日服卅日)繼父母(忌十日服三十日)夫(忌三十日服三十日)妻(忌二十日服九十日)嫡子(忌二十日服九十日)末子(忌十日、服三十日)養子(同上)夫の父母(忌三十日服百五十日)祖父母(同上)高曾父母(忌十日服三十日)伯叔父母及祖父母(忌二十日服九十日)兄弟姉妹(同上)異父母兄弟(忌十日服二十日)嫡孫(同上)末孫(忌三日服七日)曾孫玄孫(同上)從兄弟姉妹(同上)甥姪(同上)

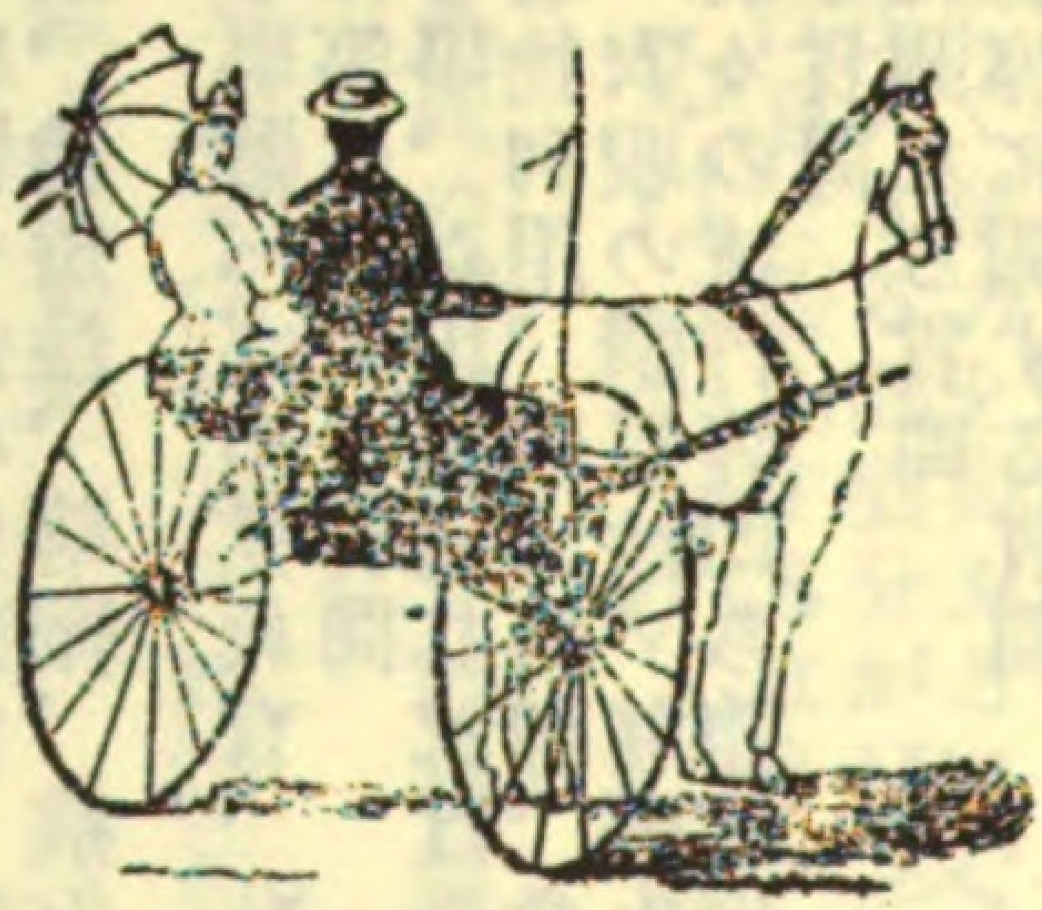
◎第六問(京橋、MS君へ)　色の褪めたる眞鍮のランプを美麗ならしむるには油のテーブル匕一杯と白灰の同量とを混し、之に鹽同一匕と醋二匕とを加へ、フ

ランネルの切を其内へ浸し全部を磨きたる後、別に温湯に十滴のアンモニヤ液を落したるものを他の布片に浸して拭ひ、而して後清潔なる布片に乾白灰をつけ磨けば元の美麗となるなり

◎第七問(丹後北濱君)　男子用に眞岡の形付中柄を第一等の流行とし、其柄合は古代模樣或はくづし模樣(たとへば牡丹くづしの如く)近來は横縞頗る流行を極む、但し這は意氣の趣ありて高尚にはあらず、價格は壹圓内外、日本橋區通一丁目白木屋、同區駿河町越後屋等け流行向新柄を販賣す、前號百三號社交一班の部を參照あれ

◎義捐金　本誌に掲げたる那須野育兒曉星園の記事につき篤志家大坂安枝鹿三郎氏より金壹圓同園へ寄附せらる

目に青葉山ほとゝぎす初松魚



道問へば一同に動く田植がさ

社告

本社主筆徳富猪一郎久しく歐米諸國漫遊の處去八日桑港出帆明二十六日横濱着の豫定につき歸朝の上は主筆始め編輯員一同奮勵以て紙面の改良を計り聊か平生の愛顧に酬んと期し候愛讀諸君幸に倍舊の親交を賜ふ

六月廿五日

家庭雜誌社

『交詢』欄開始社告

新に『交詢』の一欄を増設す、こは愛讀諸君及社會を利益する微意に出でたるものにして本社は及ぶ丈の盡力を以て諸君の質問に答ふべし但し家庭の實用に資するの目的なるを以て字義又は故事又は專門の學術技藝等に關する事件は答辨の要なし

一衞生に關する事譬へば小兒養育、發育の具、時候の衞生、疾病、治療法、藥劑、病院、看護等に關する質問

一教育に關する事譬へば小兒教育、教育書類、教育の品具、學校等に關する質問

一衣食住に關する事、必用諸道具又は臺所品の得失善惡、購買法廢物利用、素人料理、食品の購買法、其得失善惡、衣服の購買法、衣服の取合せ法、時々の流行等即ち簡易生活及家事經濟一切に關する質問

一家庭的手藝に關する質問

一家畜又は園藝等に關する質問

一家庭理財に關する事譬へば貯金、銀行保險等に關する質問

一職業に關する事譬へば内職又は婦人的職業に關する質問

一其他家庭實用に關する諸種の質問

家庭雜誌社

復刻版 家庭雑誌 第2回配本（第6～11巻・別冊1）
1987年1月10日 発行
定価 108,000円

発行者 船橋 治
発行所 不二出版㈱
東京都文京区本郷5-28-3
〒113 ☎03(812)4433
印刷所 ワールド印刷
製本所 吉田製本工房